

『壮族の言語と文字』

著者：李 富強 潘 汁 訳者：項 青^[注1]

【訳者前書き】

本論文は、李富強・潘汁著『壮学初論』（民族出版社・北京、2009年12月発行）所収の「第十章 壮族語言文字與文化傳承（壮族の言語と文化傳承）」の第一から第三までを翻訳し、注釈を加えた。この論文は日本では詳しく紹介されていない壮族の言語、文字、民俗について論じられている。中国55の少数民族のうち、漢族に次いで人口の多いのは壮族で、約1800万人いる（第6回全国人口調査統計）。壮族は独自の文化、言語、文字を持つ（日本ではチワン族とも表記される。拼音ではZhuangzuと言う。チュワン族ともチャン族とも表記されることがある。本稿では見やすいため、「壮語」の時だけ、中国外務省慣用の「チワン」とする）。チワン語は漢・チベット語族（Tibeto-Chinese、Sino-Tibetan漢藏語系）の中の壮侗語派（Zhuang-Kam branch 壮侗語支）に属する。その中のチワン・タイ語群（壮傣語支）の一つである。大林太良編『東南アジアの民族と歴史』第I章「東南アジアの自然・人種・言語」〈東南アジア諸言語の系譜〉によると、壮傣語（チワン・タイ）語系諸言語には中央部のタイ中部平野やラオス低地部以外にもミャンマーのシャン州、中国雲南省やインドシナ北部等の平地と山間低地部に広く分布しており、チベット・ビルマ系諸言語もまたビルマ以外に雲南省とそれに隣接するインドシナ北部山地にも存在する。タイ諸語の分布はそこからさらに広西壮族自治区、貴州等の南中国に、チベット・ビルマ諸語の分布はアッサム、ヒマラヤ、チベットへと続いており、これらの諸言語がそれぞれ北から南へと張り出してきた様子をよく表している。壮傣語はチワン族語と雲南省に

住む傣族語を指す。現在使われているチワン語の発音記号・ローマ字形式の表記は、1955年に作られ、1957年から正式に使用されるようになった。

チワン族は主に広西チワン族自治区に住み、雲南、貴州、広東、海南島、湖南、湖北、浙江の7つの省にも一部居住している。チワン族は秦の始皇帝の統一以前から大きな力を持っていた。その一帯を駱越といい、独自の文化を持っている。この地域に注目するのは、日本の古代に行われ、そして現在奄美などに残る歌垣（歌掛け）が、このチワン族に伝承されているということである。その他焼き畑農業、高頂草屋（高い藁葺き屋根の家）、高欄家屋（高床式家屋）、入れ墨など興味深い民俗についてはすでに翻訳した「壮族の歴史起源と文化」（熊本学園大学文学・言語学論集 第25巻第2号第26巻第1号合併号）、「壮族の歴史起源と文化 其の二」（熊本学園大学 文学・言語学論集 第27巻第1号）に詳しい。

著者の李富強氏は、1965年生まれ。中山大学人類学学部・考古学専攻を卒業、同大学歴史修士（文化人類学専攻）。中央民族大学にて博士号（人類学専攻）。現在広西民族大学教授（民族学博士課程）、国家二級教授。広西民族大学民族研究センター長として、中国国家社会科学基金の重要プロジェクトの広西・首席をしている。「八桂学者」（「八桂」広西の古称）に選ばれる。主な研究課題は華南地域-東南アジアの民族歴史人類学。主な著作は以下の通り。『壮族文字的産生、消滅と再造』（単著、『広西民族研究』1996年第2期所収）、『壮族伝統服飾と人生儀礼』（単著、『広西民族研究』1997年第3期所収。『中国民族服飾研究』にも集録。民族出版社、2003年）、『壮学初論』（潘汁と共著、民族出版社、2009年12月）

なお翻訳は、広西チワン族自治区出身で日本の文学博士号を取得した項青と、文学博士学位取得後、中国に渡って教師をしている田畑博子が共同で翻訳を行った。なお注釈は原文にあった注を【原注】とし、【注】はすべて訳者が行った。

一、チワン語の特徴

チワン語は古越語を起源とする^(原注1)。漢、チベット語族との言語関係を見ると、距離は離れている。ただ同じ言語の語系に属しているだけに過ぎないもので

ある。侗 (Dong)、傣 (Dai)、水 (Sui)、布依 (Bouyei)、臨高 (OngBe)^{〔注2〕}、黎 (Li)、佤佬 (Mulam)、毛難 (Maonan)、仡佬 (Gelo)、タイ、ラオス、シャン及び拉珈 (Lak12kja24ラギヤ)^{〔注3〕} 語などと比較的近い関係を持っている。

同じ語族に属する布依、傣、臨高、タイ、ラオス、ミャンマー語と密接な関係にあり、同じ語支となる。チワン語の全体的な構造体系から見ると、以下の特徴が見られる。

(一) チワン語の音声の特徴

音声においてチワン語には、p、t、k、ʔ、p j、k j、k v、b、d、m、n、ŋ、ŋ、m j、ŋv、f、s、ɕ、h、v、l、j、ɣの23個の声母^{〔注4〕}がある。韻母^{〔注5〕}は180個があり、そのうちa、e、i、o、u、uの6個は基本母音である。韻尾は-i、-u、-m、-n、-ŋ、-p、-t、-kがあり、舒声韻と塞声韻の二種類を分けている^{〔注6〕}。チワン語の調類^{〔注7〕}は全部8個あり、そのうち6個が舒声調、2個が促音調である。舒声調は調類ごとに、ひとつだけの調値^{〔注8〕}をもつ。それぞれは24、31^{〔注9〕}、55、42、35、33である。促声調^{〔注10〕}はすなわち母音^{〔注11〕}の長短の違いによって、調類ごとに2つの調値に分けている。

(二) チワン語の音節構成の特徴

語彙上において豊富な単音節は、チワン語の重要な特徴の一つである。チワン語の単音節語^{〔注12〕}は語形と語尾の変化はなく、また荷載意義上の音節として、特別に発達している。そのため比較的うまく意味を表現できる。意思上の混乱は少ない。

チワン語の合成語には複合式、陳述式、支配式、修飾式、簡略式、補充式、重複式と附加式等の種類がある。これらの構成はそれぞれの特徴を持っている。例えば陳述式(主語と述語)の音節構造語は、主に人体器官の名称と述語的な特性を持つ語素^{〔注13〕}で構成される。

漢語	チワン語
气愤 (怒る)	ho2 da:t7 (喉熱い)
烦恼 (悩む)	ho2 pu:n1 (喉毛生える)
舒畅 (愉快、心地よい)	ho2 oŋ2 (喉もの通る)
害羞 (はにかむ)	na3 ba:n1 (顔の皮薄い)
忌妒 (妬む)	ta1 diŋ1 (目赤い)
沉默寡言 (口数が少ない)	pa:k7 nak7 (口重い)

支配式 (述語と目的語) の音節構造語は、動詞性の語素とその後ろに支配されている名詞性の語素によって構成されている。これらの名詞的な語素の多くは、具体的な物である (原注2)。

漢語	チワン語
隐瞒 (隠す)	om5 kok7 (埋める根)
叛变 (裏切る)	fa:n1 sim1 (翻る心)
认识 (認識)	yo4 na3 (知る顔)

漢語の補充式音節構造語は、述語的な語素が後ろにある。チワン語は反対に述語的な語素は前に置き、後ろには名詞的、あるいは述語的な語素を後におく (原注3)。

漢語	チワン語
大声打鼾 (大きな鼾をかく)	kjan1 mou1 (鼾をかく豚)
狼吞虎咽 (貪るように食べる)	kun1 kuk 7 (飲み込む虎)
窒息而死 (窒息して死ぬ)	ta:i1 bot7 (溺死)

1. チワン語の修飾式複合語の語彙の構成特徴

チワン語の修飾式複合語の語彙の構成特徴は、さらに明確である。漢語の中で

修飾構造複合語として、中心的な言葉は後ろにあり、修飾するものは前に置かれる。チワン語はそれと反対である。中心語は前にあり、修飾する語は後ろにある。

(1) 名詞の語素で名詞を修飾するとき、二つの語素の順序はチワン語と漢語は正反対である。

漢語	チワン語
猪肉 (豚肉)	no6 mou1 (肉猪)
奶汁 (母乳)	yam4 na:u5 (水の奶)
睫毛 (まつげ)	pu:n1 tai (毛の眼)

(2) 形容詞の語素で名詞を修飾するとき、語彙の構成特徴は、チワン語は名詞語素の前にあり、形容詞語素はその後ろにおく。漢語と正反対である。

漢語	チワン語
大树 (大樹)	fai4 hu:n1 (樹大きい)
白菜 (白菜)	plak7 pu:k8 (菜白い)
绿豆 (緑豆)	tu6 heul (豆青い)

(3) 動詞の語素が名詞の語素を修飾するとき、漢語は動詞の語素が前、名詞の語素は後ろになり、チワン語は正反対になる。

漢語	チワン語
霹靂 (落雷)	pla3 cək7 (雷霹)
生日 (誕生日)	no:n2 se:n 1 (日生)
去年 (昨年)	pi1 kva5 (年去)

(4) 量詞の語素が名詞の語素を修飾するとき、チワン語の構成語順は、漢語と反対である。

漢語	チワン語
块肉 (○切れの肉)	no6 dak7 (○肉塊)
条鱼 (○匹の魚)	pja1 tu2 (○魚条)
棵树 (○本の木)	fai4 ko1 (○樹棵)

(5) 動詞の語素を中心に動詞を構成するとき、漢語は動詞語素が後ろにつき、壮語は反対に動詞の語素を前に置く。

漢語	チワン語
微笑 (微笑む)	yiul ŋum3 (笑う微か)
空谈 (無駄話)	ka:n3 pa:k7 (よくしゃべる)
重视 (重視する)	jau3 nak7 (見る重い)

(6) 形容詞の語素を中心に形容詞を構成するとき、チワン語の語順と漢語の語順は異なる。

漢語	チワン語
金黄 (金色)	hen3 kim 1 (黄金)
桃红 (ピンク)	din1 ma:k7 ta:u2 (紅桃)
漆黑 (真っ黒)	dam1 det7 (黒い漆)

(7) 漢語の方向を表す方位語は、方位語の語素の後に「辺」「面」「方」を加えて構成する。しかしチワン語では方位語の語素を後ろに置き、その前にpa:i6 (辺)を入れて構成する。

漢語	チワン語
西方（西の方）	pa:i6 sail （方の西）
右边（右側）	pa:i6 kva2 （方の右）
前面（前面）	pa:i6 na3 （方の前）
外边（外側）	pa:i6 ro:k8 （方の外）
下边（下の方）	pa:i6 la3 （方の下）

2. チワン語連語の構成特徴

チワン語の句の構成は、単語の構成と同じくかなり独特な特徴を持つ。

(1) 代詞^{〔註14〕}は名詞を修飾する複合語の中で、漢語は一般的に前にあり、チワン語は後ろに来る。

①指示代詞と量詞は、名詞を修飾する複合語の中で、漢語の連語の型構成は、指示代詞＋量詞＋名詞となる。壮語の連語の構成は、量詞＋名詞＋代詞である。

漢語	チワン語
这只鸭（この1羽のアヒル）	tu2 pit7 nei4 （一羽アヒルこの）
那把刀（あの1本の刀）	fa:k8 mit8 han4 （本刀あの）
这些树（これらの樹木）	ki3 fai4 nei4 （これら樹木これ）
那些田（あれらの田畑）	ki3 na2 han4 （あれら田畑あれ）

②人称代詞が名詞を修飾する時、漢語は二通りの形式がある。一つは人称代詞＋名詞、もう一つは人称代詞＋助詞＋名詞である。しかしチワン語は一般的に名詞が前にあり、人称代詞は後ろにある。またある時は名詞＋tu6（助詞）＋人称代詞となる。

漢語	チワン語
我妹妹 (私の妹)	ta4 nu:n4 kou1 (妹私)
你叔叔 (あなたのお父)	ta4 a:u1 mu:n2 (叔父あなた)
他父亲 (彼のお父さん)	ta4 po1 te1 (父親彼)
他的刀 (彼の刀)	fa:k8 mit8 te1 (本刀彼)

③疑問代詞は、名詞を修飾して連語を構成する際に、漢語は疑問代詞が前、名詞が後ろとなるが、チワン語は一般的に名詞が前、疑問代詞は後ろに置く。ただし「kei3la:i1 (多少。訳：いくら)」、「ma2」と「ki3ma2 (什么。訳：なに)」のみは除く。

漢語	チワン語
谁的家 (誰の家)	ya:n2 pou4 lau2 (家誰)
哪个的犁 (どなたの犁)	ca:il pou4 lau2 (犁どなた)
哪条河 (どの川)	ta6 lau2 (川どの)

(2) 漢語の副詞が形容詞を修飾するときの連語の構成は、副詞は前にあり、形容詞は後ろに置く。チワン語は時には正反対である。

漢語	チワン語
很好 (とても素晴らしい)	de:il yau6 (素晴らしいとても)
十分甜 (とても甘い)	va:n1 ya:i4 ca:i4 (甘いとても)
最红 (もっとも赤い)	d in1 la:i1 (赤い最も)

(3) 漢語の副詞が動詞を修飾するときの連語の構成は、副詞が前、動詞は後ろになる。チワン語は時にはこれと反対となる。

漢語	チワン語	
先吃 (先に食べる)	kun1 ko:n5	(食べる先)
再读 (もう一度読む)	tok8 tem1	(読むもう一度)
怎样编 (どのように編む)	sa:n1 pan2 lau2	(編むどのように)

(4) 形容詞をもって名詞を修飾するとき、漢語は形容詞が前にあり、時には助詞を借りて後ろの名詞と連結する。チワン語は名詞が前に来て、形容詞は後ろにあり、助詞を使わない。

漢語	チワン語	
大水牛 (大きな水牛)	va:i2 hun1	(水牛大きい)
旧衣服 (古い服)	pu6 kau5	(衣服古い)
低旱地 (低い畑)	yei6 tam5	(畑低い)
深河流 (深い河川)	ta6 lak8	(河川深い)

(5) 形容詞をもって名詞を修飾するとき、チワン語は時には語頭に加えるか、語尾に付け加える等の方法を用いる。

漢語	チワン語	
青年男子 (若い男子)	luk8 sa:i1	(若い男子)
青年女子 (若い女子)	luk8 sa:u1	(若い女子)
小鸭 (小さいアヒル)	pit7 luk8	(アヒルの子)
小山 (小さい山)	pja1 uk8	(山小さい)

(6) 量詞をもって動物の名詞を修飾するとき、チワン語は一部の量詞が、性別を意味する働きがある。

漢語	チワン語
个	pou4 (男人)
个	me6 (女人)
只	tak8 (雄の獣)
只	pou4 (雄の鳥類)
只	me6 (雌の動物・禽類)
只	ɕo6 (小さな雌の動物)
只	ha:n6 (小さな雌のニワトリ)

(7) 数量詞をもって名詞を修飾するとき構成する連語は、漢語は数量詞が前に来る。しかしチワン語は、数量詞が「一」となるとき、その構成する句の規則は、量詞+数詞+名詞となり、漢語と大きく異なる。

漢語	チワン語
一头牛 (一頭の牛)	tu2 deu1 va:i2 (頭一牛)
一只鸭 (一羽のアヒル)	tu2 deu1 pit7 (羽一アヒル)
一双袜 (一足の靴下)	to:i5 deu1 ma:t8 (足一靴下)

(8) 序数詞が名詞を修飾して連語を構成するとき、漢語は序数詞が前、名詞が後ろになるが、チワン語は正反対である。

漢語	チワン語
第十八棵树 (十八本目の樹木)	ko1 fai4 ta:i6 ɕip8 pe:t7 (本樹第十八)
第五张纸 (五枚目の紙)	bau1 ɕei3 ta:i6 ha3 (枚紙第五)
第六只狗 (六匹目の狗)	tu2 ma1 ta1 :i6 yok7 (匹犬第六)

(9) 形容詞をもって動詞を修飾し、さらに連語を構成するとき、漢語は一般

的に形容詞を動詞の前におく。チワン語は反対に語尾を加えたり、または固定した音節を加えたりする方法をとる^(原注4)。

漢語	チワン語
快走（早く歩く）	pai1 pau5 （急いで去る）
快织（早く織る）	tam3 tai tam3 tau5 （さっさと織る）
不断向前跳（絶えず前に向かって跳ぶ）	tiu5 juk7 juk7 （続けて跳ぶ）
有节奏地跳（リズムのある跳び方）	tiu5 pai2 juk7 pai2 juk7 （一回一回跳ぶ）

★注：上の右側の日本語訳は壮族出身者の指導により、本文の意味よりさらに丁寧に訳した（特に擬声擬態語の部分）。（訳者）

(10) 名詞が名詞を修飾して連語を構成するとき、漢語は修飾語が前、助詞の「的」を使って、後ろの中心の名詞とつながる。チワン語は中心の名詞は前、修飾の名詞は後ろ、助詞は使わない。

漢語	チワン語
春天的雨（春の雨）	fun1 sei2 cin1 （雨の春）
十二月的雪（十二月の雪）	nai1 du:n1 la:p8 （雪十二月）
去年的水稻（去年の稲）	han4 na2 pil kva5 （稲去年）

(11) 動詞が名詞を修飾して連語を構成するとき、漢語は動詞が前にあり、助詞の「的」を持って名詞とつながる。しかしチワン語は名詞が前、動詞が後ろ、または定量詞ki3（些。訳：いくらか）を句の前におく。あるいはあるものの語尾にnei4（这。訳：この）あるいはhan4（那。訳：あの）をおく。

漢語	チワン語
吃的飯 (食べる飯)	hau4 kun1 (飯食べる)
走的狗 (歩く犬)	ki3 mal pla:i3 (犬走る)
读的书 (読む本)	ki3 sau1 tok8 han4 (本読む)
住的房屋 (住む部屋)	ki3 ya:n2 jou5 nei4 (部屋住む)

(12) 陳述関係の言葉が名詞を修飾して連語を構成するとき、漢語の規則は、主語+述語+的+名詞となる。チワン語の規則はki3 (定量詞) +名詞+主語+述語+han4 (指示代詞) となる。

漢語	チワン語
父亲吃的飯 (父食べる飯)	ki3 hau4 po6 kun1 han4 (飯父親食べる)
老师穿的衣服 (先生着る服)	ki3 pu6 la:u4 sail tan3 han4 (服先生着る)
农民住的房子 (農民住む部屋)	ki3 ya:n2 nuŋ2 min2 jou5 han4 (部屋農民住む)

(13) 支配関係の言葉が、名詞を修飾して連語を構成するとき漢語の規則は、動詞+目的語+的+名詞となり、チワン語は名詞+動詞+目的語となる。

漢語	チワン語
读书的人 (本を読む人)	vun2 tok8 saw 1 (人読む本)
炒菜的人 (野菜を炒める人)	vun2 ce:u3 pjak7 (人炒める野菜)
喝酒的女人 (酒を飲む女)	me6 buk7 kun1 lau3 (女飲む酒)
割稻子的镰刀 (稲を収穫する鎌)	li:m2 kve3 hau4 (鎌割る稲)

(三) チワン語の構文 (syntax) の特徴

次に構文の方を見てみよう。チワン語の文の中の連体修飾語と補語の位置は、漢語と明らかに異なる。二つの目的語があるとき、目的語の位置も異なる。

1. 連体修飾語

(1) 漢語の中で主語を修飾する連体修飾語は、主語の前にくる。しかしチワン語は後ろにくる。

○漢語： (外边的) 房子 倒塌了。
 [外の 部屋が 崩れた]
 連体修飾語 + 主語 + 述語

チワン語： ya:n2 (pa:i6 ro:k8) la:k7 leu6
 房屋 外边 倒塌了
 [部屋 外 崩れた]
 主語 + 連体修飾語 + 述語

○漢語： (我的) 衣服 破了。
 [私の 服が 破れた]
 連体修飾語 + 主語 + 述語

チワン語： keul pu6 (kou1) va:i6 leu6
 衣服 我 破
 [服 私の 破れた]
 主語 + 連体修飾語 + 述語

(2) 漢語の中で目的語を修飾する連体修飾語の場合は、目的語の前にチワン

語の場合は後ろになる。

○漢語： 你 是 (好) 人。

[あなた は いい 人]

主語 + 述語 + 連体修飾語 + 目的語

チワン語： Muɯŋ2 tuɯk8 vuŋ2 (dei1)

你 是 人 好

[あなた は 人 いい]

主語 + 述語 + 目的語 + 連体修飾語

○漢語： (他的) 父亲是 (我的) 叔叔。

[彼の お父さんは 私の 叔父さん]

連体修飾語 + 主語 + 述語 + 連体修飾語 + 目的語

チワン語： ta4 pɔ1 (te1) tuɯk8 ta4 a:u1 (kou1)

父親 他是 叔叔 我

[父親 彼は 叔父さん 私]

主語 + 連体修飾語 + 述語 + 目的語 + 連体修飾語

2. 補語

漢語では補語は目的語の前に置くこともできるし、後に置くこともできる。また同時に前と後に置くこともできる。しかしチワン語の補語は目的語の後しか置くことができない。

○漢語： 我 刚 吃完 饭。

[私 ばかり 食べ終わった ご飯]

主語＋述語＋補語＋目的語

チワン語：kou1 na:m5 ku:n1 hau4 ?im5

我 剛 吃饭 饱

〔私 ばかり 食べる ご飯 腹一杯〕

主語＋述語＋目的語＋補語

○漢語： 他 写字 很好。

〔彼 書く字 とてもうまい〕

主語＋述語＋目的語＋補語

チワン語：te1 ya:i2 sau1 deil la:i

他 写字 好 很

〔彼 書く字 うまい とても〕

主語＋述語＋目的語＋補語

○漢語： 我们 唱起 歌 来了。

〔我々 歌う 歌 始めた〕

主語＋述語＋補語＋目的語＋補語

チワン語：tou1 ei:n5 kol hu:n3 tau3

我们 唱 歌 起来

〔我々 歌う 歌 始める〕

主語＋述語＋目的語＋補語

3. 二重目的語

この他、二重目的語の文の中に、ものをさす目的語以外の疑問代詞、或いはも

のをさす目的語には数量詞をもって修飾する形でなければ、チワン語の文の構成は漢語と異なる。漢語は人を指す目的語は前に置き、物を指す目的語は後ろに置く。しかしチワン語は反対に物を指す目的語は前、人を指す目的語は後ろに置く。その上動詞は重複して使う^(原注5)。

○漢語： 我 给 你书。
〔私 あげる あなた 本〕
主語＋述語＋目的語＋目的語

チワン語： koul hau3 sawl hau3 mun2
我 给 书 给 你)
〔私 あげる 本 あげる あなた〕
主語＋述語＋目的語＋述語＋目的語

○漢語： 外婆 给 (我们) 家 鸡。
〔おばあちゃん くれた 私たち 家 ニワトリ〕
主語＋述語＋連体修飾語＋目的語＋目的語

チワン語： ta:i5 hau3 kai5 haw3 ya:n2 (toul)
外婆 给 鸡 给 我们 家)
〔おばあちゃん くれた ニワトリ くれた 私たち 家〕
主語＋述語＋目的語＋述語＋連体修飾語

以上述べたようにチワン語は、音声、語彙のほか、文の構造上も独特な個性を持っている。以上の用例でそのすべての特徴を包括する事は難しいが、ある意味ではチワン語が一種の独特な民族言語であることを多少は証明できた。

二、チワン語に対する漢語の影響

壮族の先人たちは、早くは新石器時代から漢民族との文化交流があった。そのため漢民族の言語はチワン族地区およびチワン族人々の中に古くから入り込んでいた。もとより壮と漢の人々の長い歴史の交流の中で、言語の相互影響はあった。現在の研究の結果によれば、古代漢語の中には確実に一定のチワン語が吸収されていた^(原注6)。また現代漢語の中にもチワン語の存在が認められる。しかしながら長い歴史の中で、漢民族はチワン族にとって、ずっと生産力が先進的なものであった。その上、歴代の封建王朝の統治者と文人たちは、大漢民族主義的民族政策を推し進めてきた。また壮族の先人たちに対して、いつも「開化」しようとしていた。彼らに対してその文化を平等に学ぼうとする態度はなかった。彼らの言語でさえも“野蛮な言語”と見なしていた。それ故漢語のチワン語に対する影響のほうがはるかに大きかった。

(一) 漢語の借用語

漢語がチワン語に対してどのように影響を与えているかと言うと、それはチワン語の中に大量の漢語が多いことに表れている。言語学者の研究によると、チワン語の中の漢語の借用語は上古、中古と現代の各時期^[注15]に存在する^(原注7)。現在のチワン族の人々は、日常会話や物語を話すとき、少なくとも10%の漢語の借用語が混じっているが、もし政治や時事内容を話すときは、漢語の借用語は、半数以上を越える。一部分の言葉は、チワン語の中で元の民族の言葉があるにもかかわらず、発音や意味の近い・或いは同じものを漢語から借り入れ、チワン語と併用する。一部の漢語の借用語は、民族の言葉より広い範囲で使用されてすらいる^(原注8)。

多くの漢語の借用語から見れば、古い借用語（上古、中古の借用語）の文字の読み方としての古全濁音声母字^[注16]は、チワン族の南部方言^[注17]の中で、一般的には無気の破裂音で読み、しかし北部方言^[注18]の中では無気の清音で読んでしまう。韻攝^[注19]においては、假攝^[注20]の三等字は多くは「i」と発音し、遇攝^[注21]の合口^[注22]の三等字、止攝^[注23]の三等字の多くは「ei」と発音する。流

撰^[注24]の三等字の韻母は多くが「ou」と発音する^(原注9)。

声調の面においては、古い借用語は、陰平、陽平、陰上、陽上、陰去、陽去、陰入、陽入の8調を借り入れた。漢語は以上述べた8調は、それぞれチワン語の第1調から第8調に相当する。その声調は一般的にもチワン語の固有の声調と同様に変化を起した。古い借用語を取り入れる時間が長かったため、声母、韻母にしても、声調においても互いに組み合わさった関係となってしまった。ほぼチワン語の固有の語音系列と適応している。各地の方言中の語音の変化も、基本的にチワン語の言語の法則に沿っている^(原注10)。ただし、新しい借用語(現代の借用語)は、取り入れる時間が短く、膨大な量の故、全部チワン語の固有の言語音法則には影響を受けていない。そのため声母、韻母、声調及びそれらの組み合わせる関係においては、すべてチワン語の元来の語音体系を突破している。まず声母においては、新借用語の発音にはいくつかの新しい声母を加えた。例えば上思地方のチワン語には、もともと口蓋化声母はなかったが、新借用語の中にはpj、phj、tj、thj、sj、lj、kj、khjなど口蓋化の声母が現れた^(原注11)。

南部チワン語方言の大部分地域では、もともと一つだけ清・濁両声母類からなる破擦音tsは存在しているが、摩擦音のçは主に漢語の借用語から吸収されたものである^(原注12)。武鳴県のチワン語の中でも、もともと破擦音tsとtshがなく、ただ摩擦音çのみがある。それなのに新借用語のθen6tsen2(宣传<宣伝>)、tsen6tsin5(专政<專政>)、tshi2kjo2(赤脚<訳:裸足>)などの単語の声母は、すなわちtsとtshである^(原注13)。また都安県のチワン語は、もともとpj、mj、tvなどの声母はないが^(原注14)、それに対して新借用語のtai4pjau3(代表)、θəu5mje6(消灭<消滅>)、tvan6tsin(锻炼<訳:鍛える>)などの単語の声母はpj、mj、tvとなる^(原注15)。

韻母においては、新借用語はしばしばもとの音系に基づいて更なる新しい韻母を追加した。例えば韻母のəは、元来わずか少数のチワン語の方言中に使われていたが、現在の壮族地域では、広く使われるようになった。kə2min5(革命)、ein5eə2(政策)、su3kuək7(祖国)、eilən2(车轮<訳:車輪>)、siət7səu2(如果<訳:

もし～ならば)、kiən5siəp7 (建設〈建設〉)、lap8ciən2 (立場〈立場〉)、pultəil (部隊〈軍隊〉)、lo2pək8 (萝卜〈訳：大根〉) などの新借用語ですべて韻母のəが使われている。また舌尖母音^[注25]のɿとyは、元来多くの地域のチワン語にはなかった。それなのに現在ではしばしばチワン族人の言語の中に現れる。上思県のチワン語の新借用語の中には、fa:p8lyt8 (法律)、soylsy:n3 (思想)、suy5 (税)、tsʰ4tɕl4 (自治)、kɯŋ5tsʰ5 (工資〈訳：給料〉)、tsʰ6ta:n3 (子弹〈訳：弾丸〉) などの韻母はyとɿが含まれている。

声調においても、大量の新借用語の出現に従って、一部分のチワン語の方言は、チワン語本来の声母と声調の体系を突破されていた。例えば邕寧、龍州のチワン語は、本民族の言葉と早期借用語の中で、有気声母はほとんど単音節の韻母との組み合わせしかないのに、複数音節には現れないが、philphin2 (批評〈批評〉)、tho:n2jen2 (团员〈団員〉)、tho:n2ke2 (团结〈團結〉)、thun2təi3 (同志)、thi2ka:u1 (提高〈訳：向上する〉) などの新借用語は広く使われているため、元来南チワン語体系を突破していった。また龍州チワン語の中で、failki1 (飞机〈訳：飛行機〉)、fa:n5tai3 (反对〈反対〉)、fa:n5tun3 (反动〈反動〉)、fan1len1 (翻身〈訳：立ち上がる〉) などの新借用語が数多く使われているため、fの声母が単音節に現れないももとの規則から外れていった。その他に、一部のチワン語の方言では、新しい声調の種類、調形^[注26]、声調の高低値が追加された。例えば上思県のチワン語の中で、新借用語の発音は現地の官話^[注27]により近い。元来上思チワン語の中には、現地の官話の上声(55)と同じ声調はなかったのも、新しくそれに近い発音の昇降調(54)^[注28]を追加した^(原注16)。その他上思チワン語の中で、現地の官話に基づいて新借用語を発音する際に、陽平の発音は現地の官話に近い第4調(42)で読むこととなっている。これはすなわち上思チワン語のもとの第4調(31)の基礎の上に、新しい調型と調値を追加したからである。

(二) 漢語のチワン語文法に対する影響

チワン語の語彙、音声は漢語の影響を受けるだけでなく、その文法もまた漢語

の影響をかなり受けている。

1. 漢語から虚詞^[注29]を借用

チワン語は漢語の中から以下の虚詞を取り入れている。

bou3 ta:n6	(~のみならず)、
an1 vi6	(~のために)、
so3 ji3	(~だから)、
ta:n6 nan2	(もしも)、
ei3 au1	(~でさえあれば)、
bou3 lun6	(たとえ~であろうと)、
ei4	(かえって)、
ji:n2 nau2	(~あるけれども)、
yi:n2	(~にそって)、
sun6	(~にしたがって)、
ji:n5	(~にむかう)、
pei3	(~とくらべる)、
tan2	(~へ行く)、
jou5	(~が~にある、从。/~から~へ)

これらの詞を取り入れたため、おおいにチワン語の文の構成の表現力を豊かにした。

2. 句の構造の変化

漢語の影響を受けたために、チワン語の伝統的な句の構造にいくらかの変化をもたらした。

(1) 連体修飾語の位置

①本来チワン語の連体修飾語の位置は、中心となる言葉（主語と目的語）の後にある。しかし現在のチワン語は漢語の助詞te6（的。訳：～の）を借用したため、体詞^{【注30】}性を持つ語は中心語となる言葉の前に置き、連体修飾語として使う事が出来る。

〈例一〉

漢語：（我的） 鞋 破了。

連体修飾語＋主語＋述語

（私の） （靴） （破れた）

早期チワン語：to:i5 ha:i2 (kou1) va:i6 leu6

主語＋連体修飾語＋述語

（靴）（私の）（破れた）

新チワン語：(kou1 ti6) to:i5 ha:i2 va:i6 leu6

連体修飾語＋主語＋述語

（私の） （靴） （破れた）

★注：早期チワン語というのは昔のままで、漢語の影響を受けていないもの。新チワン語というのは漢語の影響を受けた句の構成を指す。以下同じ。（訳者）

〈例二〉

漢語：（打魚的）人是（我）哥哥。

連体修飾語＋主語＋述語＋連体修飾語＋目的語

（魚を捕る）（人） （是）（私の）（お兄さん）

早期チワン語：(khap8 pja1 pu4 an3) vun2 tuk8 kol (kou1)

連体修飾語 + 主語 + 述語 + 目的語 + 連体修飾語
(魚捕る) (ひとり) (人) (お兄さん) (私の)

新チワン語 : (khap8 pja1 ti6) vun2 tuk8 (kou1 ti6) kol
連体修飾語 + 主語 + 述語 + 連体修飾語 + 目的語
(魚捕る) (人) (私の) (兄さん)

〈例三〉

漢語 : 我 有 (一件新的) 衣裳

主語 + 述語 + 連体修飾語 + 目的語
(私) (ある) (一枚新しい) (衣裳)

早期チワン語 : kou1 mi2 keul deu1 pu6 (mo5)

主語 + 述語 + 目的語 + 連体修飾語
(私) (ある) (一枚) (衣裳) (新しい)

新チワン語 : kou1 mi2 jit7 keul (mo5 ti6)' pu6

主語 + 述語 + 連体修飾語 + 目的語
(私) (ある) (一枚) (新しい) (衣裳)

②漢語の修飾性を持つ連語はひとまとまりのものとして取り入れ、その時の語順は、完全に漢語と一致する。

〈例一〉

チワン語 : te1 tuk8 (jou6 siu5) ha:k8 sen1

主語 + 述語 + 連体修飾語 + 目的語
(彼) (は) (優秀な) (学生)

〈例二〉

チワン語：(jau2) tsa:i6 mi2 pu4 (mo2 fa:n5)ta:i5 pja:u3
 連体修飾語 + 主語 + 述語 + 連体修飾語 + 目的語
 (われわれの) (村) (いる) (ひとり模範の) (代表者)。

(2) 補語の位置

本来チワン語の補語は、一般的には目的語の後にあるが、漢語の影響で現在のチワン語は、時には補語を目的語の前におくこともある。

〈例一〉

漢語：風 吹 断了 樹。
 主語 + 述語 + 補語 + 目的語
 (風) (吹く) (切れる) (樹)

早期チワン語：hjum2 tsvil fai4 hjak7 le6
 主語 + 述語 + 目的語 + 補語
 (風) (吹く) (樹) (切れる)

新チワン語：hjum2 tsvil hjiak7 le6 fai4
 主語 + 述語 + 補語 + 目的語
 (風) (吹く) (切れる) (樹)

〈例二〉

漢語：他 打 死了 两只老虎。
 主語 + 述語 + 補語 + 目的語
 (彼) (打つ) (死ぬ) (二頭の虎)

早期チワン語：tel mop8 so:n1 tu2 kuk7 ta:i1

主語 + 述語 + 目的語 + 補語

(彼) (打つ) (二頭の虎) (死ぬ)

新チワン語 : tel mop8 ta:i1 so:n1 tu2 kuk7

主語 + 述語 + 補語 + 目的語

(彼) (打つ) (死ぬ) (二頭の虎)

〈例三〉

漢語 : 我 向北邊 去。

主語 + 補語 + 述語

(私) (北側へ向かう) (行く)

早期チワン語 : kou1 pail eo6 pa:i6 pak7

主語 + 述語 + 補語

(私) (行く) (向かう北側)

新チワン語 : kou1 ji:n 5 pa:i6 pak7 pail

主語 + 補語 + 述語

(私) (向かう北側) (行く)

3. 言語使用上の変化

漢語のチワン語に対する強烈な影響は、チワン語に対する全体の句の構造に浸透しており、その上壮族の人たちの言語の使用上にも反映している。漢語の長い歴史の中で強い影響を受けたため、現在のチワン語の人々の言語使用状況は以下のような状況になっている。

(1) チワン語しか話さない交流方法

これは非常に閉鎖的な環境の下で暮らしている壮族の人々で、特に壮族の老人や女性に多い。特に年配の女性が多い。

(2) チワン語と漢語の両方を使って交流する方法

これは主に都市部に近い町、都市と農村部にある町（農村部にある非農業人口を中心とする）で暮らしている壮族の人や若い世代が多い。

(3) チワン語の発音で漢語を読む「チワン漢語」で交流する方法

これは主に広西壮族自治区の邕寧県、上林県、横県、賓陽県、貴県、扶綏県及び隆安県、馬山県などの一部の郡部の人々に限られる^(原注17)。

(4) 漢語しか使えない交流の方法

これは主に都市部と一部の都市と農村部にある町の壮族、特に若い人々に限られる。

これらの状況は、チワン語が壮族の人々の唯一の交流の手段だと言う局面が崩れていったからである。チワン語は壮族の人々の交流と文化の伝播の道具だけでなく、漢語もすでに壮族の人々の交流と伝播の道具になっている。そして長く都市部に暮らしている壮族の若者は、母語を失っている。これは壮族の伝統と文化の継承と発展に不利なことである。言い換えれば壮族の人々がしだいに母語を失っていくことは、壮族文化の消滅に結び付く。壮族の伝統文化の振興の為に改善の措置をとるべきである。

三、壮族文字の変遷

(一) 壮族文字の誕生

壮族先住民は多くの古い民族と同じように、歴史上すでに物・記号や図絵等によって物事を記録していた。これは文字の発明と誕生の兆しである。

1. 物で事柄を記述する

いわゆる物で事柄を記述するということは、つまり実際に対面している数字や事件を物で記録する方法である。壮族の先住民が、この物で事柄を記述するとい

う方法は、史籍の中に多くの記載を残した。

例えば『嶺外代答』には、広西壯族の年の初めごとに「土の杯十二個をもって水を貯めさせ、十二時刻の順番に従ってその水を捧る。一夜の啓示を経て、もし杯の中に水があれば、すなわちその月は早魃にならない」と記す^{〔注31〕}。これは水杯で物事を記述するものである。また『粵述』には

俚僚“賽老者、即本地年高有行之人。凡里中是非曲直、俱向此老論說、此老一一評之。如甲乙俱服、即如決斷。不服、然后訟之于官。当其論賽之時、其法頗古、甲指乙云、其事如何、賽老則置一草于乙前、；乙指甲言、某事如何、賽老又置一草于甲前。論說既畢、賽老乃計算而分勝負。”^{〔注32〕}

(訳:俚僚(少数民族)の寨老^{〔注33〕}というものは、即ち本地の年高い徳行ある人をさす。およそ郷里中の是非・曲直は、ともにこの老人に向かって論評させる。如し甲乙俱に信服すれば、その通りに決断する。もし不服であれば、その後この事を官に訟(あらし)わせる。その寨(さい)は優劣を競うことを論じる時、その方法は極めて古い。甲は乙を指して、某事は如何という際は、寨老は一本の草を乙の前に置く；乙は甲を指して、某事は如何という際には、寨老又一本の草を甲の前に置く。全部論じ終わったら、寨老はそれぞれの前の草の数を計算して、数で勝負を決める)

という記録がある。これは藁草をもって原始の事柄を記録する方法である。

ほかに、中華民国の謝次彦が編集した『鳳山県志』^{〔注34〕}には次のように記録されている。

山瑶峒壯、不識漢字。生人登記之法、每人備一竹筒、每年至十二月三十日夜、拾一小石塊、投入筒中、以記年歲、名曰筒。欲知年齡、將筒倒出數之。兒小由父母登記、長大自身管理、自与漢民雜處后、請漢人代登記、始有時日。

(訳:山に住む瑶・峒・壯の人々は、漢字を知らない。子供が生まれた時、

子供を登録する方法は、一人ごとに竹筒を用意し、毎年12月30日の夜、小石を一つ拾って筒の中に入れる。それをもって年齢と記す。これを「筒（トン）」と名づけた。年齢を知りたい時には、筒の中から小石を取り出して数える。子供が小さい時は親が行い、そして大きくなったら自分で管理する。漢民族と入り混じって住むようになると、漢人に頼んで代理で登録するようになった。ここで初めて月日を意識するようになる）

これは石によって事柄を記録するという事象である。その他に見ていくと、古代から近代に至るまでの間、広西壮族の西北地域に暮らす侗・苗・瑤族の民族の村々の間に、共通する通信手段の信号合図がある。この合図もまた実物をもって表現する。例えば鶏の羽根は「大至急」、牛の足は「すぐに行動する」、炭は「火事が起きた」、唐辛子は「これ以上我慢できない」、烏倍板^{〔注35〕}は「すぐに武器を持って戦う」という意味を表していた^{（原注18）}。

実物をもって事柄を表す方法は、今なお壮族の日常生活の中で見られる。筆者の1991年の調査の結果では、広西平果県旧城郷興寧村局爽屯の壮族は、毎年正月10日に鶏の魂を呼ぶ行事を行う。それは粽の葉^{〔注36〕}を使って包を作り、その上に線香を挿す。それを村の入口の池に持って行って、浮かべる行事である。その後小石を拾いながら家に帰る。その時家の鶏の数と同じ数の小石を拾わなければならない。また靖西地州一帯に住む壮族は、毎年年末大晦日の夜に、木の皮で牛の形を切って作り、紐で巻き連ねて牛舎にかける。それぞれの家の牛の数だけ牛の形を作り、それらをつなげてつるした。これらの現象によってわかるのは、壮族原住民は昔から実物をもって物事の意味を表わしていたということである。

2. 記号で記録する

物によって標記をし、または物の上に記号をつけて一定の意味を表わす。これは記号で物事を記録するという。現在すでに把握している資料に基づいて壮族の記号で事柄を記録する方法を整理すると、①草を結んで意味を表わす②枝を挿し

て意味を表わす③木を刻んで意味を表わすという三つの方法になる。

(1) 結草で意味を表わす

これは一掴みの草を一つの結び目を作ることで、「占有する」、「警告する」、あるいは他の意味を表わしている。現在の壮族の「社」^[注37]の集団生活の中で、この方法は日常的によく見かける。広西の西部に住む壮族の人々は、この記号をチワン語で「hauh (号)」と呼ぶ。すなわち「認定する」の意味である。もし村の周辺道路に牛の糞があり、その上に木の枝が挿してあったり、草の結び目を置いてあったりしたら、それは壮語でmaxbangj (馬綁) と言い、この牛の糞はすでにだれかが所有する糞であり、先にこの場所を定めたという意味で、あとで時間のある時に取りにくるという意味を示している。もし山の斜面や山の上の草が茂げっている場所で、茅が一定の間隔で結び目を作っているならば、この辺りの茅草に所有者がいることを意味している。また田圃と畑を取り囲む道の両端に、結び目の草を挿している場合は、それはこの田圃や畑がすでに穀物の種や、他の農作物の種が蒔かれていることを意味している。人と家畜が踏まないように知らせている。

またある時、山や田圃の畔に乾いた干し草や、切って揃えた若い草があり、そのそばに結び目の草があるならば、これは誰かが印をつけたものである。あるいは、山や畑の横に干した木の枝と若い草が束にして置いてあり、そのそばに結び草がおいてあるならば、これは人がわざと残したものであることを意味する^(原注19)。

草を結んで物事を示すという方法は簡単ではあるが、壮族の村では老若男女問わず、みなその意味がわかっている。その上、みな自覚的にこのルールを守っている。西林県では壮族の人々が新しい土地を開墾する際は、選ばれた地域の周りと真ん中にくつつかの結草を置く。この土地はすでに主があることを示している。他の人はこの結草を見て、自らその意味を知り、自覚的に別の場所を探す^(原注20)。柳城県古砦の壮族の人々は、生産生活の中に草を結ぶことを通して共通のある意味を示している。例えば山の中の田圃を犁で土を耕したり、鍬で土を掘り起こしたりして、すでに農作物が植えてあった場合、草の結び目を木の枝に結んで、田

の中に木の棒を挿せば、これは人々が田に入ってはいけないことを表わしている。また山里のある家では、しばらく豚小屋の糞を掃除しようとするとき、小屋の前に草結び目を置いておけば、この家は糞を掃除していることを意味している。村人はこれを見て、豚を外に出しているのは、糞の掃除のためであることを知る。みだりに豚を出しているのではないことを理解する。また山の中にたくさんの果樹があって、その木に草結びがあった場合、誰もそれを勝手にとることはしない。山里の民家の軒下の土台や公共用道路の盛り土の路床を、まだものごとのよくわからない子どもたちが棒でこじ開けたり、穴を掘ったりした場合、その場所に草の結びを置いておけばもう誰もそこをいたずらすることはない。あるいは誰かが家に来ると約束した後、急用で出かけなければならない時、家に草結びを挿しておけば来客は自然にその意味がわかる^(原注21)。また広西寧明の公母山の麓に住む若い壮族の男女達は、野原でデートをする時、自分たちの気に入る場所を選んで、入り口に草結びを挿しておけば、誰もここに近づかない。上林、柳江、忻城、靖西、那坡などの県の壮族にもこのような習慣が20世紀の50～60年代まで依然として残っており、草結びで物事を記録する方法を行っていた。

(2) 枝を挿して物事の記録をする

一本、あるいは数本の木の枝を挿すことで、何かの意味を記すこと——それは挿枝のしるしである。この方法は壮族の村々にある結草のしるしと同じようによく見られる。中でも村の至るところに見られるのが、新しい牛の糞の上に一本ずつ枝が挿してあるものである。それは牛糞にすでに持ち主がいるというしるしを示している。他に種をまいた畑の真ん中に一本の枝を挿しておけば、そこに人や家畜が中に入らないように警告していることを意味している。また畑や家庭菜園に一束の木の枝が瓜の上、または瓜の柄に掛けてあるならば、それは人々にこの瓜は、主が選んだもっとも立派な種瓜であることを意味している。ある家の軒下に、橙、蜜柑、ザボンなどの木の枝を挿してあるならば、その家の女性が出産中または出産前後であることを示している。靖西県では、壮族の若者の男女がデートをする時、どちらか

が先に着いたら葉のついた枝を折って、交差点、または山道の道端の最も目立つところに置き、そしてその上に小石を置いて抑える。木の枝が指す方向は、すなわちデートの場所の方向である。この方法は壮族の人々の普通の生活の中でも数人で、ある場所に向かうときにも使われている。もし誰かが先に行くときは、道の真中に一本の新しい木の枝を置いて、石を置いて抑える。後から来た人がこれを見れば、待つ必要がないことがわかり、そのまま出発する^(原注22)。

(3) 木に刻んで物事を記す

この方法は、竹や木、あるいは獣の骨の表面に記号を刻んで意味を記す方法である。『郡国志』には、

小西山（中略）人分三種、曰僚、曰冉家、曰南客^[注38]。暖則捕獵山林、寒則散処岩穴、借貸以刻木為契、婚姻則累世為親、編戸一岩三十里。

（訳：小西山（中略）、人を三種類に分ける。僚、冉家、南客という。暖かくなれば山と森の中で狩猟をし、寒くなれば至るところの岩洞に住む。それで何かを貸借する際には、木に刻んでそれをもって契約とした。婚姻すれば代をかさねるごとに親類が増えていく。戸籍簿に組み入れられた世帯は、一岩洞の中に住む三十戸を里（村）としてまとめて編成する。）

『嶺表紀蛮』^[注39]には

壮峒瑶峒各族、近已書立契、「砍刻木」之俗、已無所聞。惟苗山区域、所居無論苗・瑶・侗・壯、多以刻木結草為契約、其交通較便之区、間或改用字契、然糾紛每多發生于契之中。

（訳：壮族と瑶族の村に住む各民族は、近頃すでに書くことによって契約をすることになった。“砍刻木（切り刻んだ木）”という風習は、すでに聞かなくなった。しかし苗山地域に住む苗・瑶・侗・壯各族は、いまだ刻木、結草

をもって契約をする。そのうち交通が比較的便利な地域は、たまには文字による契約に改めているが、揉め事が度々に起こり、その原因の多くは文字で書かれた文書の中に問題があるからである。)

木に刻んで物事を記すという方法は、貸借関連に使うだけでなく、軍事通信手段としても使われている。古代において壮族の各村には、外敵からの侵略があった場合、相互に助け合わなければならないという決まりがあった。ある村に緊急の事態が起こった場合、すぐに隣の村に通報する。その時の通報方法についてはいくつかある。銅鼓を叩いたり、銅鑼を鳴らしたり、爆竹を鳴らしたり、猟銃の音で知らせたりした。しかしこれらの方法でうまく伝えられなかった場合は、木に刻んで割符として知らせるのが有効な方法であった。急いで送らなければならない時は、一枚の板に特別な記号を刻む。それは明代・桑悦^[注40]の『壮俗詩』に次の詩句がある。「幾回輯事軍先覚、木刻伝村有別謀。(何度も事を起こそうとしたが、軍に先に発覚した。それで木に刻んで村の人に伝えて別の計略をおこなった。)」この木に刻んで記録する方法(刻字記事)は、現在の壮族の中にも残存している。例えば都安県に住む壮族には、共産党成立の初めの頃から20世紀の50~60年代まで刻木に関する記録がある。例えばもし甲が乙から三斗の米を借りる場合、一枚の竹板、あるいは木切れを取り、その上に三本の痕(あと)を刻む。それを半分に割り、甲と乙のそれぞれ半分を持つ。甲が米を返しに来た時に、両方それぞれ持っている竹板、木切れをぴったり合わせて、確認が出来たらそれを壊す。それによって相互の貸借が解消する。

また靖西県の壮族では、もし妊婦が死亡した場合、その墓の上に二本の竹板を立てる。その竹板の上には、沢山の刻み痕(あと)を刻む。一本一本の線は時間を表わし、びっしりと刻まれることによって、その妊婦の魂は永遠にこの世に戻れない。そしてそれは家族や他の人に災いをもたささないことを意味している。これらも壮族がかつて刻木をもって、物事を記していたことを反映している。

3. 図画で物事を記録する

いわゆる図画で記録を残すということは、物事の形を模写したり、絵を描いたりして、その物事のある種の意味を表わすことである。これは装飾用の絵画と本質的に異なる。

考古学の資料を見れば、壮族の先住民は図画による記録の例が実に多くある。例えば広西恭城県に出土した春秋時代晩期や戦国時代初期の青銅器の中に、2例の銅製の酒壺がある。そのうち一つは口の下から腹部まで雷紋と蛇と蛙の戦いの絵があり、それぞれ「道」^{〔注41〕}という格子形の枠があり、一つの枠には四つの枠組がある^{〔原注23〕}。これはおそらく壮族の先住民の中での、蛇の一族と蛙の一族との戦いであろう。なぜなら蛇と蛙は壮族の先住民のトーテムであるから。民族学の知識によれば、我々現代人は原始人類の思惟の中で、集落間の戦いはすなわちトーテムの中での戦いであると知っている。

嶺南地区で発見された銅鼓の中に図画で記事を記録する例は、たくさんある。例えば一部の銅鼓の表には、よく蛙の像が塑造されている。これらの塑造の配列は、対称になっている。それは当然ある種の装飾の意味合いと役割がある。ただし筆者は次のように考える。重要なのはその一族の記号の作用があることである。潯江、黔江の両岸に発見された冷水冲型^{〔注42〕}銅鼓は、表面に蛙の彫像があるにもかかわらず、馬に乗っている彫像がある。この馬に乗っている彫像は、馬援が南に下って交趾を征服する^{〔注43〕}時の記憶の彫像と見なすべきである^{〔原注24〕}。

広西貴州羅泊湾の漢代の墓と西林県普駄の墓から出土した銅鼓の表面に、船の模様が彫塑されているものが四例ある^{〔原注25〕}。これは壮族先住民のドラゴンボートレースの記録である。西林県馬蚌郷田家老寨から蒐集された西林七号銅鼓の表面に、耕牛図の浮き彫りがある。その浮き彫り図には半袖、かつ幅が狭い服を着た一人の農夫が、左手で鋤を持ち、右手に鞭を持ってそれを振り下ろしている。そして角が曲がっている水牛を御して畑を耕している構図が描かれている^{〔原注26〕}。これは当時の壮族先住民の農作業の記録である。

その他に麻江型銅鼓^{〔注44〕}の内壁には、複雑な線で絵が描かれている。柳州で

発見された銅鼓の内壁には、高床式が主体の建築や、魚池、圓形の穀倉、稲科の穀物を日に干す等の施設の絵が刻まれている。その周りには蔓草や花もある。中心の建築の屋根には、持ち上がる山型の屋根があって、平らの棟木、または二本の立柱で屋根を支えている。支柱の上には屋根、梁があり、梁の上に棟の三段積み木が描かれている。その屋根の積み木の端には釣鐘が掛っている。両柱の間には二人が並列で立っており、ともに片手は柱を倒れないように支えている。そして二人の間には四角の敷物がある。この家屋の右には魚のいる池があり、長方形の形をしている。池の中には魚と蔓草がある。圓形の穀倉は笠の形をしている欄干式の建物^{〔注45〕}である。中心の建築物と反対側にある。その横は穀物を日に干す支柱（稲架）は、五本の立柱で作られている。両側に斜めの支柱がある。その横には倉がある^{（原注27）}。

また東蘭県蘭陽村で今も使われている麻江型銅鼓は、その胴部と表の周りには紋様がある。中でも特徴があるのは銅鼓の中の内壁に一組の図があることである。この図には15人の人物が描かれている。二重の庇をもつ東屋があり、その東屋を中心に時計回りにそれらの人物が配列してある。東屋の真中の一人が、手の舞いで足を踏む姿で踊っている。配列の最初の二人は同じ服装をしており、頭に派手な丸い帽子をかぶっている。肩に斜めに一本の竿を担いでいる。竿は前が低く後ろを高くして、その真ん中に環状の銅鑼をかけている。三番目、四番目の二人は口で長い喇叭を吹いている。それぞれの頭には一本の編み込んだ髪の毛（辮髪）が上向きに立っている。五番目、六番目は膝を超えるような長いワンピース状の服を着ている。頭の天辺の編み込んだ髪も上に向いている。両手に竿を持って、竿の先には旗がある。七番目もまた竿を持っており、竿の先にはふわふわした装飾がなされている。八番目は馬に乗っていて、頭に髻（まげ）があり、その上に編み込んだ小さい辮髪がある。九番目、十番目は、二人で輿を担いでいる。輿の中には小さな人がいる。十一番目は肩に薪を担いでいる。十二番目は肩に桶のようなものを担いでいる。九番目から十番目の頭の上には、みな上を向いた長い辮髪が描かれている。最後の一人は馬に乗って、左手には手綱を持ち、頭に丸

い装飾品を戴いている。そして頭の後ろには長いおさげ髪をなびかせている。馬の後ろには左から右に向かって縦二列に刻まれた銘文がある。ここに書かれたものは「如有此宝 世太(代)為官(もしこの宝を持つならば、代々官僚となる)」。さらにその後ろには横斜めに「万宝家財」と銘文が書かれている。この一組の図案は古代の蛙祭りの断片を記録するものである。(蛙を探して村を遊行した後に、蛙の東屋に帰る場面)

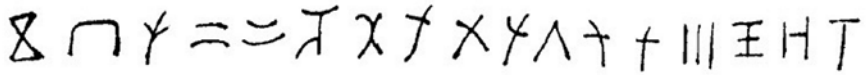
壮族先住民の絵による記録方法は、銅鼓や他の器物のみならず、岩に絵を描くのも一種の重要な形式であった。広西壮族自治区左岸流域の寧明、龍州、崇左、扶綏、大新、凭祥、天等などの県には、多くのこのような岩壁画が発見された。大まかな統計によれば、全部合わせて岩壁画は84個、183カ所に描かれている(原注28)。その岩壁画は壮族先住民が、ある宗教信仰に対する儀式を実録したものである。

(二) 壮族原始文字の発生と消滅

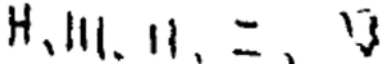
およそ中原の商・周の時期^{【注46】}、すでに壮族先住民には文字の萌芽があった。この事実は、壮族先住民の駱越の居住地嶺南地区から発掘された大量の考古学の資料から説明することができる。

20世紀50年代初期、広西欽州市大寺鎮的那葛村定昔岭で、鯨の頭の形をした商代の大きな石磬^{【注47】}が発見された。石磬の大きさは長さ53cm、もっとも広いところが16cm、厚さは2.4cmで、青灰色をした頁岩で作られてある。その正面の内側に高さ20cmの樹木が1本刻まれている。木の上に花や葉が絡んで、天辺から両側にアーチ状に伸びていき、笠の形になっている。その石磬の背面には「キ、丄、川、一、X、W」の記号が刻まれている。1987年11月、同じ場所でびかびかに磨かれていた磬(石斧)^{【注48】}が2丁発見された。そのうちの1丁には、「X、V、|、丄」などの記号が刻まれていた(原注29)。

広東省饒平で商王朝の陶器が出土したが、その中に17の器物の表面に合わせて17個の記号が刻まれていて、計以下の13種類がある(原注30)。



広東省普寧県の梅塘で発見された商王朝の陶器の上には、以下のような記号が刻まれている^(原注31)。

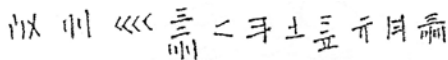


商王朝末期から西周時代前期の広東省佛山市河宕遺跡では、六、七十枚の陶器の破片（器）の上に、さまざまな絵模様の記号や文字が刻まれているのが発見された^(原注32)。

広西武鳴県馬頭元龍坡の西周の古墳から、石製の鋳型が一つ見つかった。その上には「卅」の記号が刻まれていた^(原注33)。

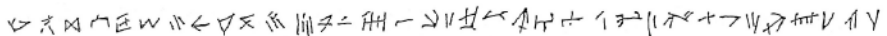
広東省清遠で出土したおよそ西周末期から春秋までの陶罐が見つかり（幾何学の模様とやや硬めの円筒状の陶器）、その肩のところに「T」の形の記号が刻まれていた^(原注34)。

広東省石峡遺跡の上層（西周末から春秋時代）から出土した陶器の一部、その口縁の周り、茶碗の高台に十一種類の記号があった^(原注35)。

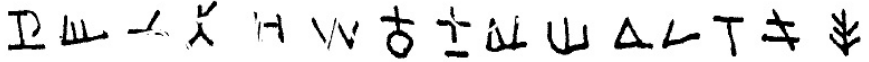


その他に広東省暹崗^(原注36)、広西賀県の三圳碑^(原注37)の遺跡から出土した器物の上にも、さまざまな記号が刻まれている。

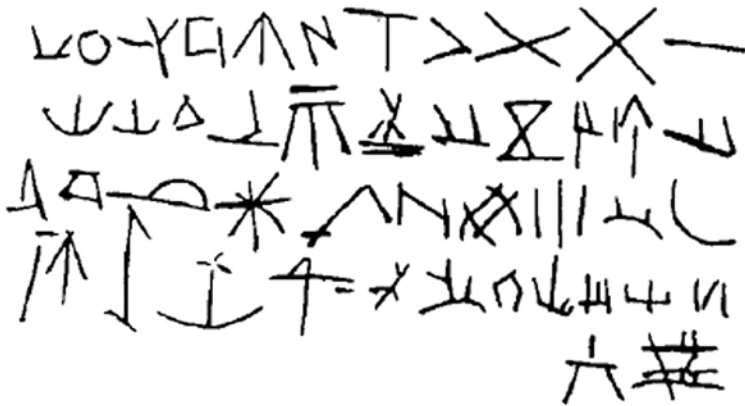
戦国時代に至ると、嶺南地区の器物上の刻画記号はさらに一般的となった。1974年に発掘された広西平楽県銀山岭の戦国時代の古墳の中には、百あまりの器物があり、それらの器物の上にすべて刻画記号があった。以下の40種類以上の異なる記号がある。そのうち繰り返して出てくるのは10種類である^(原注38)。



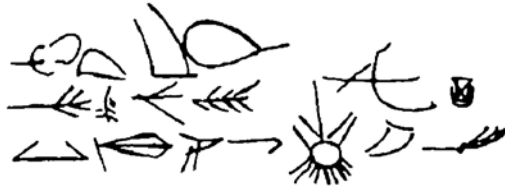
武鳴県馬頭安等養山の戦国時代の古墳から出土した数多くの陶器の表面には、記号が刻まれているが、以下の十五種類がある^(原注39)。



広東省増城西瓜岭の戦国時代遺跡から出土した陶器の中にも、相当数の刻画がある。これらの記号の多くは茶碗、杯、盅（取手のない湯飲み）、盒（蓋付きの容器）、盂（鉢）の底部に刻まれており、約72%を占める。また一部は瓮、罐、釜の腹・肩部、及び口縁に刻まれており、約28%を占める。各種の記号はあわせて45種類ほどあり、そのうち6回以上重複して出現するものは8種類、2回～5回ほど出現するものは10種類、1回のみ出現するのは27種類がある^(原注40)。



広東省始興県白石坪の戦国時代の遺跡から出土した瓮、罐、缶^[注49]類の器物の腹部の紋様の中にも、よく見られる様々な刻み記号があった。大まかに統計すれば、およそ以下の15種類がある^(原注41)。



以上各遺跡から出土した絵を描いた記号は、重複して出現されているものは少なくない。これは同一の遺跡からいくつも出土するだけでなく、他の遺跡からも出土している。例えば「巨」の記号は、広西賀県三圳碑に見られる。「V」は広州市暹崗、粵東饒平及び広西銀山嶺、定昔嶺などの遺跡でも見られる。「++」は広西武鳴県馬頭元龍坡の西周時代の墓で、また武鳴馬頭安等養山の戦国時代の墓に見られる。「T」は広東省清遠、増城の西瓜嶺の戦国時代の遺跡に見られる。「十」は広西定昔嶺、銀山嶺などの遺跡で見られ、「一」は広西定昔嶺、銀山嶺、及び広東省増城の西瓜嶺などの遺跡で見られる。「川」や「X」は広西定昔嶺、西瓜嶺などの遺跡で見られる。「ム」は広西銀山嶺、馬頭安等養山の戦国時代の遺跡等で見られる。これらの記号は、上に挙げた各遺跡の器物上の刻画記号としてよく見られ、一定の統一性や規範性を持っていることが分かる。それ故、たとえこれらの記号が簡単で、かついい加減なものであり、その上多くは単発的に表れているが、中には必ずある意味をもつ文字と言えるようなものが存在していることは間違いない。言い換えればこれらの商周時代の刻画記号の中に、すでに文字の萌芽が見られるということである。

目下の資料から見ると、以上述べた嶺南地域で発見された刻画記号、あるいは文字は、江南のその他の地域でも発見されている。例えば「一」、「川」、「X」、「十」、「止」、「T」、「V」、「E」、「卩」などの記号、あるいは文字は、江西省呉城^(原注42)、上海市馬橋^(原注43)、安徽省屯溪および福建省福清市の東張、福州市の浮村遺跡や、台湾鳳鼻頭等の遺跡からも発見された。しかも

その中の一部分は、すでに一応識別されている^(原注44)。そのため、これらの萌芽状態の文字は、当時の越族^[注50]の文字がすでに統一されていることを意味する。また壮族の原始文字は越族文字の一部分に属するである。

壮族原始文字——— 刻画文字は、商の時代から戦国時代へと萌芽から次第に成長してきた。しかし戦国時代以降、刻画文字の萌芽は継続的に発育成長せず、次第に衰えてしまった。その理由は秦の始皇帝の嶺南統一にあった。先進的な漢字が嶺南に流入したためである。構造が合理的、かつ流通範囲が広く、高いレベルの漢字との衝突によって、壮族の原始文字は衰弱し、淘汰された。

(三) 壮族文字の再建——— 方塊壮文字^[注51]と拼音壮文^[注52]の発生と応用

漢字が嶺南に入った結果、壮族の原始文字の存在理由が消滅したにもかかわらず、新しい壮族の文字——— 方塊壮文字が発生することとなった。それは秦の始皇帝が嶺南を統一したのち、大量の中原人が嶺南にやってきたことと関係する。先進的な漢字は、壮族の人々の中でますます広がりを見せ、深く影響を与えた。そして壮族の人々の生活の中での役割は欠かせないものとなっていく。当初、壮族の人々は、壮字の応用として漢字を使い、チワン語の発音を表わしていた。1984年、調査隊は広西壮族自治区合浦県の爆竹工場の敷地内に発見された漢代の古墳から、陶製の醴壺(酒つぼ)を発見した。その酒壺の上に「西于」という文字が刻まれていた。これは当時の壮族先住民が、自分の器物の上に刻まれた自分の族名であろう。また漢字をもって壮族の発音を記し、壮族の原始文字を取って代わるものでありながら、壮族の原始的なものを記述する方法の補充としていた。当時において、ある意味有効な手段であるが、ただしこの方法は明らかに不足している所がある。例えばチワン語の「有」[mi31]を壮族の人々は、漢字で書くときは「眉」と書いてしまうし、「成」[pan31]は「貧」と書いてしまう。また「来」[tau55]は「闕」と、「去」[pai24]は「丕」と、「到」[tang21]は「騰」と、「門」[tau24]は「儉」と、「稻草」[ja:ng55]は「響」と、「丈夫」[kwa:n24]は「関」と^[注53]、その他いろいろな例はあるが、結局それらは象形文字でもなく、会意

文字でもないために、そのまま漢字をチワン語の発音として表記することは、発展性がなかった。それゆえ漢字に基づいて本民族にふさわしい文字を作り出す理由は、歴史発展の中での要求であり、必然でもあった。

唐代になると、漢字に基づいて壮文字の創造の機運が熟していった。それはまず秦の始皇帝が嶺南を統一した後、大量の中原人が嶺南にやってきた。特に魏、晋、南北朝の時期は、移民の波が嶺南地域に新たな民族の大融合を起こした。民族交流の発展のため、壮族の土俗文字（方塊文字ともいう）の創造のよいきっかけとなった。次なる条件が唐代は中国封建社会の全盛期であったため、壮族地区の経済・文化の発展も早めさせた。このような背景のもとで壮族の文化、芸術は大いに刺激を受け、新たな文字を創造し、文字によって記録を残す必然性が生まれた。また長期にわたって壮族先住民は、漢字をもってチワン語の音を記している。漢字の構造や造字の原理は、比較的よく理解していた。さらに唐王朝は、中原の封建文化を押し進めることを重視していたため、多くの文人や名士たちは、壮族の人々を教化することに熱心だった。壮族の若者たちの多くは、科挙を受けるために漢文を学び始めた。そして結果的に嶺南地区の儒生、文士がたくさん誕生した。例えば柳宗元は、柳州に赴任したときに「不鄙其民、勸以礼法（その民を卑しめず、例と法をもって勧める）」^{【注54】}とし、韓愈は潮州において^{【注55】}書院を設け、学問を講じることを提唱した。また壮族の子弟の中にも韋敬辦^{【注56】}、韋敬一^{【注57】}等のような多くの文学者や教養の高い文人たちを輩出した。チワン語の方塊文字の発展に、それらの人材は多くの寄与をした。そこで壮族の土俗文字は唐代の時運に乗じて誕生できた。現在、広西上林県麒麟山の「澄洲無虞県六合堅固大宅頌」の石碑を見ることができる^{（原注45）}。これは今見ることのできる最古の物的証拠である。この碑文は唐・永淳元年（682年）に澄洲刺史の韋敬辦が執筆したものである。碑文の中に「𠄎」、「𠄏」、「𠄐」、「𠄑」、「𠄒」等の方塊文字がある。

宋代における方塊壮字については、多くの文献の中に見られる。『桂海虞衡志』には、次のような文がある。

俗字、辺遠俗陋、牒訴券約、専用土俗書、桂林諸邑皆然。今姑記臨桂数字、雖甚鄙野、而偏傍亦有依附。𡗗(音矮)、不長也。闔(音穩)、坐于門中、穩也。奎(亦音穩)、亦穩也。𡗗(音女)、小兒也。𡗗(音動)、人瘦、弱也。𡗗(音終)人亡絶也。𡗗(音臘)、不能拳足也。𡗗(音大)、女大及姐也。𡗗(音礪)、山石之岩窟也。𡗗(音𡗗)、門横闔也。他不悉記。余閱訟牒二年、習見之。^{【注58】}

(訳: 俗字は遠地辺鄙なところで、帳面・訴訟・証書・契約書などを書く時に、もっぱらこの土俗文字で書かれた。桂林以外の諸々の地域もみなそうである。今、ひとまず臨桂地域の数文字を記してみよう。甚だしい野卑のものとはいえ、偏と旁がちゃんと区付いている。例えば𡗗(音は矮)、長くないという意味である。闔(音は穩)、門の中に坐るということは平穩であることをいう。奎(また音は穩)、意味は穩やかである。𡗗(音は女)、小さい兒の意である。𡗗(音は動)、人が瘦せていて、弱い意味である。𡗗(音は終)人が息を絶えて死ぬ意である。𡗗(音は臘)、足が拳がらない意味である。𡗗(音は大)、女が大きくなる。及び姉のことをいう。𡗗(音は礪)、岩石の崖壁を意味する。𡗗(音は𡗗)、門の鍵が横から閉める意味である。他にはいちいち詳細に記さないが、これら全部は私が県知事だった時、二年間訴状を閲覧した時によく見たものである。)

また庄紳『鷄肋篇』には次のような文がある。

広南里俗、多撰字画、父子為恩、大坐為穩、不長為矮、如此甚衆。^{【注59】}

(訳: 広南^{【注60】}の風俗には、数多くの字画を自分で作ると言うのがある。父子は恩となり、穩は大坐となり、不長は長くないとなる。このようなものは甚だ多い。)

『岭外代答』にも次の事をいう。

広西俗字甚多。如𡗗音矮、則不長也。奎音穩、言大坐則穩也。𡗗音動、言瘦弱也。𡗗音終、言死也。𡗗音臘、言不能拳足也。𡗗音女、言小兒也。𡗗徒

架切、言姊也。𠂇音𠂇、言門横関也。𠂇音𠂇、言岩崖也。余音泓、言人在水上也。𠂇音魅、言没人在水下也。研音東敢切、言以石擊水之声也。^[註61]

(訳:広西は俗字が甚だ多し。例えば「𠂇」の音は矮であり、則ち成長しないことをいう。「𠂇」音は穩であり、大きく坐るため平穩であることを意味する。「𠂇」音は動、瘦せて弱い意味である。「𠂇」音は終、死ぬ意である。「𠂇」音は臘、足が挙がる事ができない意味。「𠂇」音は女、小さい児の意味である。「𠂇」は徒架の反切音^[註62]で、姊(お姉さん)のことをいう。「𠂇」音は𠂇、門の鍵が横から閉める意味である。「𠂇」音は𠂇、岩石の崖壁を意味する。「余」音は泓、人は水の上にいること。「𠂇」音は魅、水の下に人がいないことを言う。「研」音は東敢の反切音で、石で水を撃つ音である。)

これらの記録によると宋代にはすでに壮族の方塊文字は、壮族の民間に相当流布していたことがわかる。

宋代以後、方塊壮文字はずっと壮族の民間で生き続けていて、現在でもよく見かける。1988年以来、筆者は何度も壮族地区で調査を行ったが、依然として一部の年寄りの歌手や老道公^[註63]たちがこの方塊文字を使って、創作及び記録を行っている。

構造形式から見ると、壮族の方塊文字は漢字や漢字の部首を借用していることがわかる。漢字の六書^[註64]の中のある程度の構造を利用して作っている。字の形の構造から分けると、古壮字の形式は以下の種類がある。

(1) 象形字

物に依って形を与えたり、事に依って形を描いたり、構成する文字。方塊壮文字の中に「𠂇」(漢字の意味は杖)、「𠂇」(漢字の意味は站〈訳:立つ〉)、「𠂇」(漢字の意味は坐)、「𠂇」(漢字の意味は背〈訳:おんぶ〉)、「𠂇」(漢字の意味は抱〈訳:抱く〉)などである。

(2) 形声字

二つの漢字の偏旁や部首を利用して（あるいは二つの漢字）、1文字の壮字を合成する。一つは音符を表し、一つは意符を表す。それぞれ表音表意となる。例えば「搥」（漢字の意味は「手」）、「辣」（漢字の意味は「梱」あるいは「縛」）、「媪」（漢字の意味は「伯母〈訳：おば〉」）、「沫」（漢字の意味は「沙灘〈〈訳：砂浜〉〉」）、「靐」（漢字の意味は「雷電」〈訳：雷と稲妻〉）、「刀剥」（漢字の意味は「劈〈訳：刃物でものを二つに切り裂くこと〉」）、「岨」（漢字の意味は「山」）、「室」（漢字の意味は「家」）、「天」（漢字の意味は「天」）、「畱」（漢字の意味は「田」）、「杯」（漢字の意味は「水牛」）、「鳩」（漢字の意味は「鴨〈訳：アヒル〉」）、「犁」（漢字の意味は「地」）、「閨」（漢字の意味は「門」）、「園」（漢字の意味は「園子〈訳：庭〉」）等は、この類である。

(3) 会意字

二つ、または二つ以上の漢字を使って、一つの壮字を構成する。それらの結合によって新しい意味が生まれる。例えば「𨔵」（漢字の意味は「快〈訳：速い〉」）、「𨔵」（漢字の意味は「上」）、「𨔵」（漢字の意味は「下」）、「朧朧」（漢字の意味は「月亮〈訳：月〉」）、「𨔵」（漢字の意味は「矮〈訳：身長が低い〉」）、「𨔵」（漢字の意味は「賤〈訳：賤しい〉」）、「𨔵」（漢字の意味は「地」）等は、この類である。

(4) 仮借字

漢字を借用してチワン語の意味を表わす。チワン語の方塊文字の仮借字は、以下の三種類である。

①借音字

漢字の音を借りてチワン語を記す。例えば「火」の発音の意味は、苦〈訳：苦い・苦しい〉であり、「化」の発音の意味は、討〈訳：求める〉であり、「劉

の発音の意味は、我们〈訳：私たち〉であり、「龍」の発音の意味は、「下降」〈訳：降りてくる〉である。これらの字は借音字である。

②借義字

漢語の意味を借用するが、発音はチワン語で読む。例えば「説」は「nau21」と読む、「哭」は「tai55」と読む、「風」は「rum21」と読む、「好」は「dai24」^{〔注65〕}と読む。これらは借義字である。

③借形字

すなわち漢字の形を借用して、音や意味はそれとまったく関係のない字のことを言う。例えば「可」（意味は「面」）、「往」（意味は弟妹）等は借形である。

二つの声符である漢字を使って、一つの方塊壮字を作る。例えば「𠵼」（fa:ng21、漢字の意味は「鬼」）、「𠵼」（sa:n24、漢字の意味は「白米」）、「𠵼」（kom21、漢字の意味は「低頭〈訳：頭を低くする〉」）等、この類の文字である。

また二つの意符である漢字の形を利用して、一つの方塊壮字を作る。「頭首」（rau55、漢字の意味は「頭」）、「𠵼」（ro:k33、漢字の意味は「外面」〈訳：外側〉）、「力𠵼」（kjik55、漢字の意味は「懶〈訳：怠ける〉」）、「女𠵼」（kjau24、漢字の意味は「漂亮〈訳：美しい〉」）等、この類である。

不完全ではあるが大まかな統計によると、壮族方塊文字は合わせて1万字余りある。そのうちよく使われているのは5000字余りである。長い歴史の過程の中で壮族の民間芸人は、かつて方塊文字を使って神話、故事、伝説、民謡、演劇等を創作、記録、編集を行った。特に道公や巫師等は方塊文字を使って、写経したり、御札を書いたり、唱えごとを書いたりしている^{〔注66〕}。また一部の壮族の人々は契約を書いたり、台帳の記載にもこの方塊文字を使う。その他、壮族の文人たちはこの方塊文字を使って、漢民族やその他の民族のすぐれた作品を翻訳してい

た。これらによって壮族方塊文字は、歴史上に多くの功績を残し、壮族文化の継承と広がりを輝かせることに大きな貢献をした。

ただし各地、または各地の支系の壮族の間で連絡が取れていないため、それぞれの方塊壮文字は完全に統一されておらず、同じ地域の方塊文字でも、異体字も少なくない。例えば「火」(fai21)という方塊文字は、広西の扶綏、靖西、徳保などの県では、「燹」と書くが、隆安県では「閑」と書く。武鳴県では「微」を、龍州、百色、忻城等県では「肥」と書く^(原注46)。蘇永勤等が編纂した『古壮字字典』(初稿)^[注67]には10700字の方塊壮文字が所収されている。普遍的に使われて、合理的な正字は4918字で、他はみな異体字である^(原注47)。

新中国成立後、民族の平等を実現するために、少数民族が自由に自分の民族の言語を使う権利が履行されるようになった。国は少数民族の人々の「自願自責」(自由な意志・自分で責任をとる)という原則に基づき^[注68]、大量の人力、物力、財力を投入して壮族文字を創製することに尽力した。このような背景のもとで拼音の壮文が生まれた。拼音壮文の創作の作業は1952年に開始され、長い年月の調査研究を経て、1955年、中国科学院少数民族語言研究所と広西壮族自治区言語委員会から拼音壮文の案が提出された。この方案はラテン文字(ローマ字)を基礎として、全部で32個の拼音の表記字母としたが、そのうち11個はラテン文字ではなかった^[注69]。それは北部チワン語を基礎とし、武鳴県のチワン語の発音を標準音とした。この案は二年間の試用期間を経て、1957年11月に国家国務院の許可を得た。そして正式に壮族地区での使用を推進した。拼音壮文は20世紀50年代末から60年代初めまでに、大いに広まった。1958年にはかつて290万人の人々が壮文を学習した。しかし残念なことに1966年にやむなく壮文の推進は中止された^[注70]。1980年5月広西壮族自治区は壮文の使用を再び復活させた。元の壮文の案には11個のラテン文字では表せない文字が入っていたので、文字の全体性が一致せず、統一性に欠けていた。それは壮文の学習面においては、活字の入力、印刷およびパソコン上の使い方においても困難を生じた。そこで広西壮族自治区少数民族言語委員会は、この案に対して修正を行った。なおこの案は1982年2月

2日、国家民族委員会に許可を得て正式に公表された。新しい壮文の草案はもとの案の32文字から、26文字に少なくなり^[註71]、書写する際にも、単語で書かれるようになった。行を変えるときは必ず完全な音節を保持しなければならない。20世紀80年代以降、壮族が居住する県では、壮文の学校を創立し、人々の間に壮文を読めない人がいないようにした。多くの人が手紙を書いたり、帳簿をつけたり、民謡の歌詞を記録することができた。それと同時に多くの壮文の書籍が出版され、小中学校で使われている国語の教材は、壮文に翻訳されて出版された。その他に役場の職員を養成する教材を壮文へ、広西壮族自治区の中等師範学校の壮文教材や、高等学校の壮文の教材などが編集された。拼音壮文は、壮族の政治・経済・文化の発展に対して、積極的な役割を果たした。

【原注】

- 1 韋慶穩「試論百越民族的語言」（『百越民族史論集』所収、北京、中国社会科学出版社、1982年）
- 2 王均等編著『壮侗語族言語簡志』〈壮語部分〉（P49。北京、民族出版社、1984年）
- 3 は2と同じ。
- 4 は2と同じ。〈壮語部分、P59～61〉
- 5 吳超強『漢語・壯語結構不同的比較』（『広西民族学院学报』第四号所収、1984年）
- 6 覃聖敏『略談古代漢語中的壯語』（『三月三』第一号所収、1984年）。又黃振南『宋朝文献中壯語之管窺及断想』（『広西民族研究参考資料』第五号所収、1985年）
- 7 曹広衢『壮侗語中和漢語有關係的詞的初步分析』（『民族語文』第二号所収、1983年）
- 8 は2と同じ。〈壮語部分、P46〉
- 9 張均如『広西中南部地区壯語中新借詞讀音的發展』（『民族語文』第三号所収、1985年）
- 10 王均等著『壮語及壮漢人民怎样互学語言』（P30。北京民族出版社、1979年）
- 11 は9と同じ。
- 12 張均如『壮侗語族塞擦音的產生和發展』（『民族語文』第一号所収、1983年）
- 13 は10と同じ。〈P32〉

- 14 広西壮族自治区民族語言文字工作委员会研究室、中国科学院少数民族語言研究所第一工作队編『僮族音系彙編』所収 (P160~166、1961年)
- 15 は13と同じ。
- 16 は9と同じ。
- 17 班昭『漢字在壯語中的一種特殊讀法』(『民族語文』第二号所収、1991年)
- 18 梁庭望編著『壯族風俗志』(P144。北京、中央民族学院出版社、1987年)
- 19 南寧師範学院広西民族民間文学研究室編印『広西少数民族與漢族民俗調查』第4集所収、(P301~302、1983年)
- 20 は19と同じ。〈P311~312〉
- 21 は19と同じ。〈P549~551〉
- 22 は19と同じ。〈P286~287〉
- 23 広西壮族自治区博物館『広西恭城県出土の青銅器』(『考古』第一号所収、1973年)
- 24 蔣廷瑜『銅鼓芸術研究』所収 (P98。南寧、広西人民出版社、1988年)
- 25 広西壮族自治区博物館編『広西貴県羅泊湾漢墓』(P25~29。北京、文物出版社、1988年/広西壮族自治区文物工作队編『広西西林県普駄銅鼓墓葬』所収 (『文物』第九号、1978年)
- 26 は24と同じ。〈P217〉
- 27 黄増慶『広西出土銅鼓初探』(『考古』第十一号所収、1964年)
- 28 覃聖敏等『広西左江流域壁画考察與研究』所収 (P21。南寧、広西民族出版社、1987年)
- 29 鄭超雄『壯族樂器發展源流綜述』(『民族芸術』第二号所収、1991年)
- 30 広東省博物館等『広東饒平県古墓発掘簡報』(『文物資料叢刊』第八輯所収。北京、文物出版社、1983年)
- 31 邱立誠『広東普寧県梅塘発現石・陶器』(『文物資料叢刊』第八輯所収。北京、文物出版社、1983年)
- 32 楊式挺等『談談佛山河宕遺跡的重要発現』(『文物集刊』第三輯所収。北京、文物出版社、1981年)
- 33 広西壮族自治区文物工作队『広西武鳴馬頭元龍坡墓葬発掘簡報』(『文物』第十二号所収、1988年)

- 34 広東省文物管理委員会『広東清遠発現周代青銅器』（『考古』第二号所収、1963年）
- 35 朱非素等『談談馬垠石峽遺跡の幾何印紋陶』（『文物集刊』第三輯所収、北京、文物出版社、1981年）
- 36 広州市文物管理处『広州郊区暹崗古遺跡調査』（『文物資料叢刊』第一輯所収、北京、文物出版社、1977年）
- 37 彭適凡『中国南方古代印紋陶』（P331。北京、文物出版社、1987年）
- 38 広西壮族自治区文物工作隊『平楽銀山嶺戦国墓』（『考古学報』第二号所収、1978年）
- 39 鄭超雄『壮族審美意識探源』（P120。南寧、広西人民出版社、1991年）
- 40 広東省文物管理委員会等『広東増城・始興の戦国遺跡』（『考古』第三号所収、1964年）
- 41 莫稚『広東始興白石坪山戦国遺跡』（『考古』第四号所収、1963年）
- 42 唐蘭『關於江西呉城文化遺跡與文字の初歩探索』（『文物』第七号所収、1957年）
- 43 『上海馬橋遺跡第一・二次発掘報告』（『考古学報』第一号所収、1978年）
- 44 李家和『越文化初論』（『江西歴史文物』第三号所収、1981年）/吳綿吉『越人文字探索述略』（『百越民族研究』所収、南昌、江西教育出版社、1990年）/彭適凡『中国南方古代印紋陶』（P329～335。北京、文物出版社、1987年）
- 45 広西民族研究所編『広西少数民族地区石刻碑文集』所収（P1。南寧、広西民族出版社、1982年）
- 46 張元生『壮族人民的文化遺産——方塊壮字』（『中国民族古文字研究』所収、北京、中国社会科学出版社、1984年）
- 47 広西壮族自治区少数民族古籍整理出版規劃領導小組主編『古壮字字典』（初稿）（南寧、広西民族出版社、1989年）

【訳注】

注1. 熊本学園大学講師。文学博士。中国広西壮族自治区出身。共同訳者及び日本語監修田畑博子。中国山東省曲阜師範大学翻訳学院日本語教師、文学博士。なお本文における以下の注釈は、全部訳者によるものである。

注2. 臨高（OngBe）語とは、二千年前から中国の海南島中北部沿岸に住む臨高人が使用する

言語。現在約六十万人いる臨高人は、政府から少数民族として認定されておらず、戸籍上は漢族である。しかしオンベ語自体は中国語の方言や変種ではない別系統の言語であり、百越のチワン語に近い。なお政治・経済に関する語彙は中国語からの借用語が多い。オンベ語はタイ・カダイ語族の言語とされているが、Ethnologue (エスノログ・非営利のキリスト教団体の少数言語研究団体) ではオンベ語をタイ・チワン諸語やカム・スイ諸語と語彙が共通する同系統の言語であると分類している。詳細は梁敏・張均如『臨高語研究』(上海遠東出版社、1997年) 参照。

注3. 拉珈 (Lak12kja24ラギャ) は茶山瑶の自称。山人の意味である。2000年の統計によると人口は8600人。拉珈 (ラギャ) 語は漢・チベット語族壮侗語派侗水語支に属する。当言語内部には他の方言や土俗語の分裂は見られない。広西壮族自治区金秀瑶族自治县・大瑶山地区に使われる侗台語族の言語の一つであり、侗語に近い言語である。越語に起源する可能性があり、その他の瑶族と異なる族源を持つ。茶山瑶の多くは拉珈語を母語とし、現在絶滅危惧言語の一つでもある。2000年の統計によるとある程度拉珈語が分かる人は約7000人の使用者しかいない。藍慶元『拉珈語研究』(広西師範大学出版社、2011年) 参照。

注4. 声母は伝統的な中国音韻学でいう漢字字音の初めの子音。例: bao (報) のb, feng (豊) のf, shou (収) のshが声母である。ai (愛) のa, e (鵝) のe, ou (藕) のou等母音で始まる音節の声母を「零声母」(ゼロ声母) という。

注5. 韻母とは漢字の音のうち声母(頭子音)を除いたほかの部分。これをさらに韻頭(または介母音をいう)、韻腹(または中心母音をいう)、韻尾(または末音をいう)の三部分に分ける。例: Jiaoのiは韻頭、aは韻腹、oは韻尾。

注6. 「舒声」は古代漢語の四声のうち、入声を除いた平・上・去の三声をいう。促声ともいう。舒はのびる、促はつまるの意。「塞声」は破裂音(閉鎖音)のことで、B・P・D・T・G・K等があり、「擦音」は摩擦音(閉鎖音)のことで、F・H・X・S・SH・R等がある。「塞擦音」は破裂音のことで、J・Q・Z・C・ZH・CH等がある。

注7. 調類とは言語学の声調の種類。古漢語の「調類」は平声・上声・去声・入声の四つで、現在の共通語は入声がなくなり、陰平(第一声)、陽平(第二声)、上声(第三声)、去声(第四声)に分かれる。声調とは中国語の音節(原則として漢字一字は中国語では一音節で発音

される)は、高低昇降の音調を伴って発音される。

注8. 調値とは声調の高さ、各調類の実際の音調。

注9. 本文には「21」とするが、「31」の間違いである。参考文献は岩佐昌暉『中国の少数民族と言語』（光生館、1983年7月）第Ⅲ章の2.3（チワン・タイ語群表14「チワン語の声調」（舒声調））による。

注10. 促音調は古代中国語の四声の一つ「入声」のことで、韻尾に-p、-t、-kの子音を持つもの。

現在は共通語の中には入声はないが、一部の方言（例えば広東語等）には残っている。

注11. 共通語の「a・e・o・i・u・ü」をさす。

注12. 一つの音節からなる単語。中国語では通常は漢字一字からなるが、「花兒」「歌兒」などの「兒er」は独立した音節をなさないで、これらも単音節語である。

注13. 語素は形態素ともいい、単語を構成する要素。意味を有する最小の言語単位。

注14. 代詞は、名詞句だけでなく、動詞句や様態を指示するものも含まれるので、代名詞とすることができない。指示代詞、人称代詞、疑問代詞の三種類がある。

注15. 借用語における上古、中古の時代の分け方は、上古は紀元前11世紀～4世紀、周・秦～漢代～三国・晋代、中古は5世紀～11世紀、南北朝時代～隋・唐～宋代を指し、現代は20世紀を指す。佐藤昭『中国語語音史——中古音から現代音まで』「第一章1,1中国語語音史の時代区分」（白帝社、2002年3月）による。

注16. 古全濁音声母字とは、古代には音声記号がなかったので、一つの声母を一つの漢字で代表させて、それを「字母」或いは「声紐」「紐」等といった。文献の記載によると、宋代には36個の字母があった。またこの三十六字母を「唇・舌・齒・牙・喉・半舌・半齒」等の音調部位と「全清・全濁・次清・次濁・又次清・又次濁」等の調音方法とによって配置した。この全濁音声母字は「b・v・d・dz・g」等七個がある。李思敬著・慶寿谷信・佐藤進訳『音韻の話——中国音韻学の基本知識』第1章「漢語の音節の概要」1.5「北京音系の声母体系と古代の字母」（光生館、1987年9月）による。

注17. チワン語は大きく二つの方言圏に分かれているため、南部チワン語方言とは、東は横県と欽州市を結ぶ線、北は邕寧県、南寧市の南、隆安、徳保、那坡、広南の南、硯山を結ぶ線、西は雲南省文山チワン族ミャオ族自治州、南はベトナムとの国境線に囲まれた地帯をいう。

内部はさらに5つの土語に分けられる。

注18. 北部チワン語方言とは、東は広西チワン族自治区の龍勝、永福、陽朔、貴県、横県、南は南寧市、平果、田陽、雲南省の富寧、広南、邱北、西は雲南省師走、北は貴州省との省界を結ぶ線内の広い地域をいう。内部はさらに7つの土語に分けられる。

注19. 韻撰は、韻を総括すること。「韻」とは音声学的には母音、音韻学的には中国字音の韻部をいう。「撰」とは総括するという意味である。つまり現存最古の韻図は『韻鏡』といい、唐代にできたものである。現在の通行本は宋代に印刷発行されたもので、我々はそれを根拠にして、発音の近い韻を一枚の図の中に収めてある。現在206韻を43枚の図に分けて収めている。さらに発音の遠近により16の大きな枠組に統合したということで、その一つ一つを「撰」と呼び、撰ごとに代表字で名前をつけてある。十六撰の名称は「通・江・止・遇・蟹・臻・山・效・果・假・宕・梗・曾・流・深・咸」である。李思敬著・慶谷寿信・佐藤進訳『音韻の話——中国音韻学の基本知識』第3章『『切韻』音系』3.5.2「韻図の〈転〉と〈撰〉」(光生館、1987年9月)による。

注20. 「假撰」は十六撰の中「假撰」のことで、麻韻一つだけからなり、開口合口合わせて三つの韻母を含む。現代漢語音は「a/ia/ie/y/ua」と読むが、チワン語は異なる。佐藤昭著『中国語語音史——中古音から現代音まで』第三章「韻母の変遷」3.5〈假撰韻母〉(白帝社、2002年3月)による。以下注21、22、23、24も同書同章に参考したものである。

注21. 「遇撰」は十六撰の中「遇撰」のことで、「魚・虞・模」からなる合口の三つの韻母をいう。三等韻は魚・虞である。現代音は「u/y」と読む。

注22. 「合口」は「合口呼」音節のこと。漢語の音節は介音と主母音とによって分ける。介音あるいは主母音に「i」をもつ音節を「齊齒呼」音節という。介音あるいは主母音に「u」をもつ音節を「合口呼」音節という。介音あるいは主母音に「y」をもつ音節を「撮口呼」音節という。この三種類の音節に属さないものをすべて「開口呼」音節という。以上を合せて「開齊合撮」の四呼という。李思敬著・慶谷寿信・佐藤進訳『音韻の話——中国音韻学の基本知識』第1章「漢語の音節の概要」1.4「漢語の音節の分類」(光生館、1987年9月)による。

注23. 「止撰」は十六撰の中「止撰」のことで、支・脂・之・微の韻母(すべて三等韻)からなり、開口合口合わせて七韻母を含む。現代音は「ei」と読む。

注24. 「流撮」は十六撮の中「流撮」のことで、尤・侯・幽の韻母からなり、開口の三つの韻母をいう。三等韻は尤・幽である。現代音は「ou」と読む。

注25. 「舌尖母音」鈴木博之は「チベット・ビルマ諸語における「唇歯母音」の中で、「チベット・ビルマ諸語のいくつかの言語に認められる。(中略) 母音の共鳴度が低いというのは可動器官(舌)と被動器官の間が狭くなることを指し、さらに狭窄すると流れる呼気の摩擦の度合いが高まることによって、接近音、やがては摩擦音が生じることになる。「舌尖母音」として知られる [ɛ] や「そり舌母音」として知られる [ǰ] などは、共鳴度の低い、すなわちより強い摩擦性を帯びた母音である。この摩擦性に注目して、近似的に [ɛ]=[z "], [ǰ]=[ü "] と言うように、有声摩擦音を音節核とする音と同義であるという趣旨の記述がなされることがあるが、これは実際には区別されるべきものであるとされる(潘悟雲等 2012 : 4-5)。なお、[ɛ] や [ǰ] は国際音声字母 (IPA) には登録されていないが、シナ・チベット語族の言語を中心に頻出する音であるため、音標文字としては必要不可欠である(朱曉農 2010 : 17-21)」。【「チベット・ビルマ諸語における「唇歯母音」】「p17」としている。

注26. 調形、または調型。音声の周波数変化の形式をいう。例えば、北京音系には四つの調類のうち、陰平は平調型、陽平は昇調型、上声は降昇調型、去声は降調型となる。漢語拼音(ピンイン) 方案ではこの4種の調型を四声という。

注27. 官話はもともと元代以後中国各地の口語音が反映された共通語のことをいった。当時流行した元曲の中心であった大都の言葉であるとする。壮族地区の官話は揚子江上流地域を中心として使われるので「上江官話」に属し、別名は西南官話とも言う。主に四川、重慶、貴州、雲南、広西、湖北、湖南、陝西、江西、チベット、甘肅、広東、海南、福建、東南アジア北部等の地域で使用されている。最も広く使われているのは四川、貴州、雲南、湖北、広西、湖南七省と直轄市の重慶である。西南官話は明代から北方からの移民が西南地域に大量に入ったため、もたらされたものである。使用人口は2.7億人で、官話の中で一番使用範囲が広く、使用人口がもっとも多い。

注28. 「昇降調」とは、低周波で始まり、後に高周波になる「昇調」といい、高周波で始まり、後に低周波になる「降調」という声調のことを指す。本文には「54」の声調の音階がはじめからおわりまで分かる表記記号である。例えば「ma (媽・母親) 55 (陰平)、ma (麻・麻)

35 〈陽平〉、ma (馬・馬) 214 〈上声〉、ma (罵・罵る) 51 〈去声〉」等がある。李思敬著・慶谷寿信・佐藤進訳『音韻のはなし——中国音韻学の基本知識』第1章「漢語の音節の概要」1.7「北京音系の声調体系と古代の四声」(光生館、1987年9月)による。

注29. 虚詞は中国語のなかの機能語であり、意味を表わさず、ただ文の構成を助ける働きをする品詞である。一般的には副詞・介詞・助詞・感嘆詞・接続詞・擬声擬態語の6種をいう。

注30. 体詞は日本語の体言に相当する実詞のこと。体詞には、名詞・代名詞・数量詞がある。王占華・一木達彦・苞山武義編著『中国語学概論』(改訂版)第四章「中国語の文法」4.3〈単語と品詞〉(駿河台出版社、2006年4月)による。

注31. 『嶺外代答』は書名。宋・周去非撰(楊武泉校注、中華書局、1999年9月)。周去非は温州永嘉の人、南宋隆興元年(1163年)の進士である。乾道7年(1172)3月に桂林に赴任した。周去非は広西に約六年間滞在し、欽州で教授となり、静江府の県尉となった。『嶺外代答』は彼の唯一の著作で、内容が豊富で、広西に関する全体的かつ早期的な重要な文献となった。同じ宋代范成大『桂海虞衡志』三巻より七巻も多く、邊帥門・法制門・財計門・貿易門等各方面の紹介が細かく記録され、宋代における中国と西方各国との海上交通と十二世紀の南アジア、西アジア、東アフリカ、北アフリカ等国の古代史に関する貴重な資料でもあった。生物学・民俗学・民族史・手工業史等の分野においても研究価値が高い。

巻九「蛮俗門」(獠俗)には「獠在右江溪峒之外、俗謂之山僚。(中略)歳首以土杯十二貯水、隨辰位布列、郎火禱焉。経夕、集衆往觀、若寅有水而卯涸、則知正月雨二月旱、自以不差」と、引用文より詳細な本文がある。

注32. 『粵述』は書名。清・関叙著(中華書局、1985年)。広西の歴史地理に関する雑記である。関氏は康熙二年(1663年)から四年(1665)の間、広西学政に任命された。本書には広西の名勝旧跡を紹介しながら、各地の物産・風俗・特に少数民族の構成や土司制度等に留意していた。本書は見つからないため、本文のままに引用した。

注33. 本文には“寨老者”の「寨」は「賽」となっているが、文章の意味から頭人の「寨」であるべきと考え、改めた。恐らく同音字である故、假借したのであろう。

注34. 鳳山は広西壮族自治区北部の県名で、河池市に属する。紀元前111年漢武帝が南越国を平定した後、初めて郡・県として定めた。現在の面積は1737平方メートルで、人口は約22万人、

壮族人口は約14万人である。その他に瑶族・侗族も居住している。『鳳山県志』は中華民国の謝次彦が編修した書物である。本書は見つからないため、本文のままに引用した。

注35. 烏倍板は五倍子で作った板。広西北部が産地であり、2～10メートルにもなる五倍子の樹木に寄生する虫は漢方薬として使う。葉草の他に、染料・製革にも使われている。

注36. 粽葉とは、正月に広西の壮族は大きな枕〈まくら〉粽をつくる風習があり、その時に使う一葉蘭の葉のことである。数枚の一葉蘭の葉を使って、真ん中に糯米に緑豆・豚肉等の具を入れて包んで縛り、ドラム缶で一晩を茹でる。

注37. 社とは、もともと一つの集団が共同でまつる耕作の土地の神、またそのところの意を表したが、後に集団をも「社」というようになった。中国古代の制度で、民家二十五家の組織を指す。

注38. 『郡国志』によると、小西山に住む人は三種に分けられる。そのうちの「僚」はまた「獠」とも書き、北齊の紀元554年に完成した魏収編『魏書』巻100「僚伝」には「僚者蓋南蛮之別種。自漢中達於邛笮川洞之間、所在皆有種類甚多」という記録がある。「僚」は中国の西南部に住む少数民族の名である。「冉家」は「古代西南少数民族の名（『漢語大詞典』による）」、「南客」は不詳であるが、「南蛮」と呼ばれている西南地域に住む少数民族をさすのではないかと考えられる。

注39. 『哈表紀蛮』（劉錫蕃『嶺表紀蛮』アジア民族考古叢刊第五輯、南天書局、1987年1月）第十一章「木契草契與字契」その四「字契」による。

注40. 桑悦（1447～1513年）は明代の学者で、蘇州府の人。『思玄集』や『桑子庸言』等を著した。彼の『壮俗詩』の原文は次である。「幾回輯事軍先覺、木刻傳村別謀」。

注41. 「道」は古代棋・囲碁等の格子の道をいう。ここでは青銅器の酒壺の上の格子形の枠をさす。

注42. 銅鼓の最盛期の代表類型「北流型」・「靈山型」・「冷水冲型」とは、嶺南地区における銅鼓文化の三つの最盛期を代表する銅鼓の類型である。凡そ漢代から隋唐までの間に作られたものである。広西壮族自治区の北流県・靈山県と湖南省の冷水冲県等の分布地域は、互いに隣接しており、製作の時期も近い。冷水冲型は学者の分類法では、C型に属し、早期の石寨山諸型と異なる。鼓の形やその耳等、模様（蛙・鳥・羽人等）を持ち、鼓面には牛や馬や騎馬する人等、独自の特徴も見られる。

注43. 馬援は扶風茂陵の人で、漢の武帝の時(紀元前14～紀元後25年)に活躍した將軍。伏波將軍ともいう。交趾(今のベトナム)の徵側、徵貳姉妹の乱を平定した。『史記』巻113「南越尉佗佗列伝」によると、「元鼎六年冬、(樓船將軍・馬援)以数万人待伏波(中略)城中皆降伏波」とあり、漢の武帝は伏波將軍を嶺南に派遣して、呂嘉等の反乱を打ち破ったという。現在の広西壮族自治区では馬援にまつわる話が多く残っている。

注44. 麻江型銅鼓は、1956年頃に貴州省麻江県等西南部を中心に発見された隋唐時代～清朝の間に作られた銅鼓で、その地名にちなんで名付けられたものである。学者の分類法では、E型に属する。早期のものは一部冷水冲型晩期銅鼓に似ているが、晩期のものは独自の文化要素が入っている。即ち十二本の太陽紋様・同心円紋・幾何図形紋・十二干支紋・人物紋・変形蓮華紋・乳頭状紋(梵語牟尼珠紋)等の仏教的な要素が入っている。その仏教的な要素が特徴のひとつである。詳細は陳麗瓊『麻江型銅鼓紋飾研究』(中国古代銅鼓研究会編『銅鼓和青銅文化的新探索』所収。広西民族出版社、1993年10月)を参照。

注45. 「欄干」はまた「干欄」とも書き、また「干欄屋」「高脚屋」「吊脚楼」ともいう。高床構造の建物をさす。高床式住居のこと。浙江省の河姆渡遺跡から6000～7000年前のものが出土した。これらを始めとして、同種の遺跡は新石器時代から歴史時代まで、浙江、江蘇、湖北、雲南省などで発見されている。中国の西南少数民族地域を中心に、東南アジア、マダガスカル、台湾等の地域でよく見かけられる。日本の神社や穀物の倉等もその作りが多い。

注46. 中原の商・周の時期とは、黄河流域中心とする中原地域の商王朝(日本では「殷」ともいう)と周王朝のことである。およそ紀元前1700年～紀元前255年の間に相当する。小川環樹等編・改訂版『新字源』(角川書店、2001年12月)による。

注47. 石磬、石で作られた磬、古代の打楽器の一種である。

注48. 磬は石でつくられた斧状のもの。

注49. 缶は胴が太くて、口の小さな土器。

注50. 越はもともと春秋時代の国名で、後に南方の蛮族の名「越族」や「百越」として知られている。漢代に現在の浙江省東部から、江蘇・山東両省にまで版図は拡大した。又秦の始皇帝や漢代以降、西南地域の少数民族も加わり、東越・西越・南越と三つに分けられた。そのうちの西越は西甌・駱越を言い、今日の壮族を構成する主な族群である。先秦時代から後漢

まで、嶺南の広西南部・海南島・ベトナム中部・北部等中心に居住した。秦の始皇帝が嶺南を統一した際に、桂林郡に入り、その後一時期漢代の南海郡の南越国にも属したが、紀元前111年漢の武帝により、南越国が滅ぼされたため、嶺南地域に新たに九つの郡を設置した。『漢書』巻六「武帝紀」には「遂定越地、以爲南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九真・日南・珠厓・儋耳郡」と細かく分かれていた。漢代以後東越（今の福建省周辺）や南越（今の広東省周辺）等は消滅していくが、西越だけその後も存在した。駱越是西越の主流であり、広西の西南、広東の東西部、ベトナムの北部に分布する。中心は今日の柳州より南の南寧市（左右江の合流点）にあり、ここから西の雲南、北の貴州へ広がった。しかも建国以来の考古学上の発見は、広西壮族自治区・雲南・貴州・及び広東西部駱越の石器、銅器が出土した。広西壮族自治区を中心とした早期石器は種類が豊富であり、すでに中原地域との往来があったので銅甬も見つかった。特に西越民族が創作した銅鼓は広東地域において先秦時代以前の遺跡には見当たらない。また西越の双肩石斧等の石器は東越にも無かった。古人類の遺跡も数多く広西壮族自治区で見つかり、36000年前の柳州市来賓県の麒麟山人や12000年～7000年前の甌皮岩洞穴遺跡等は、西越が東越や南越の遺跡よりも古いことが実証されている。荘爲璣『建国以来対百越的歴史研究——關於東越與南越和西越的族源問題』（百越民族史研究会編『百越民族史論集』所収）による。

注51. 方塊壮文字は壮族の土俗文字であり、唐・宋時代の壮族の知識人達が、漢字の形、音、意味と六書構字法を利用して、正方形の壮文字を作ったものである。いわゆるsawleu:nj6（壮族の文字）と呼ばれていた「方塊壮字」のことである。このような土俗文字は、民間において広く使われ、民謡、故事、伝説、写経、契約、記帳などに用いられた。このあたりのことは、宋・周去非『嶺外代答』巻4「風土門」俗字の条に詳しい。現在は主に歌垣の際の歌詞を記録することが多い。清の屈大均『広東新語』巻八「劉三姐」の条には、「およそ歌を作る人は、（中略）歌を作るならば必ず祭壇に捧げて祀る。そしてそれを大切に保管する。歌を求めるものに対しては、それを写させる。しかし持ち出すことを認めない。そのためしだいに増えいき、数箱になった」と記す。今日右江の山の谷間に住む壮族には、かつて伝統的な「嘹歌」が流行していた。それは一万六千行ほどのものもあり、土俗文字で記され、今日まで流伝している。

そのほかに「この文字は民謡の創作や記録、道士（壮族民間のシャーマン・道公と呼ぶ）

の写経等に用いらただけで、民族文字として広く普及することはなかった」と岩佐昌暲『中国の少数民族と言語』（光生館）第二章「少数民族諸言語の分布とその言語的特徴」にはある。

注52. 壮文の拼音（ピンイン）はチワン語の発音記号で、ローマ字による表音式表記である。例えば「pja1uk8」は（小さい山）と表記される。この方案は1955年に作られ、1957年から正式に使用されるようになった。現在も通用している。詳細は岩佐昌暲『中国の少数民族と言語』（光生館）第二章「少数民族諸言語の分布とその言語的特徴」1.3〈チワン・トン語派、1.3.1チワン・タイ語群（壮傣語支）〉を参照。

注53. ここの例は全部チワン語が漢字の発音を借りて表音しているものである。

注54. 『旧唐書』巻160「柳宗元伝」には、「柳宗元、字子厚、河東人（中略）元和十年例移爲柳州刺史（刺史は地方長官）（中略）嶺間爲進士者、不遠數千里皆隨宗元。。」と、嶺南に住む進士たちは、数千里のところから柳宗元の元に集まってくるという記事があった。柳宗元（773～819年）は山西省河東の人で、唐宋八大家の一人。監察御史となったが、元和十年（815年）に王叔文事件に連座され、女帝武則天の恨みを買ったため、永州の司馬、後に柳州の刺史に移された。嶺南各地の進士たちは、柳宗元のもとに師として憧れ、沢山集まってきた。法や經典等を教え、その門下生必ず名士となる。著書に『柳河東集』がある。親友の韓愈は彼が亡くなった後、衣冠塚のために書かれた『柳州羅池廟碑』の碑文には、「羅池廟者、故刺史柳侯廟也。柳侯爲州、不鄙其民、勸以礼法」の句がみえる。

注55. 『旧唐書』巻160「韓愈伝」には、「韓愈字退之、昌黎人（中略）愈爲人臣、敢爾狂妄、固不可赦。（中略）乃爲潮州刺史」と記されていた。韓愈（768～824年）は河南省昌黎の人で、唐宋八大家の一人。柳宗元とともに古文復興に尽力した。著書に『韓昌黎文集』がある。元和十四年（819年）に唐憲宗に「論仏骨表」を上言した際に、言葉が率直すぎて、恨みを買って、潮州の刺史に左遷された。宋・蘇軾（1036～1101年、唐宋八大家の一人）『潮州韓文公廟碑』の碑文には「始潮人未知学、公命進士趙德爲之師。自是潮之士、皆篤於文行、延及齊民、至於今、号称易治」と、初め潮州の人々は学問のことを知らなかった。韓愈が潮州にきてから、進士の趙徳爲が師として命じられた。それから潮州の人は勉強熱心になったという。

注56. 韋敬辦は、壮族人で、唐代の澄州（現在の玉林県境内）の刺史である。現在広西上林県の麒麟山に、唐代永淳元年（682年）の「澄州無虞県六合堅固大宅頌」という石碑が保存されている。

その碑文は彼の作であり、初期の方塊壮文字で書かれている。

注57. 韋敬一、人名。壮族出身の文人で、不詳。

注58. 『桂海虞衡志』（けいかいぐこうし）は、宋の范成大（1126年～1193年）がまとめたものである。

范成大は平江（現在の江蘇省蘇州）の人。宋代乾道八年（1172年）冬、静江府（今日の桂林）の広西経略安撫使と任命された。

『桂海虞衡志』は十三篇で、淳熙2年（1175年）桂より蜀に入る途中で完成したものである。

本文は巖沛『桂海虞衡志校注』（広西出版社、1986年）による。

注59. 庄綽撰『鷄肋篇』（けいろくへん）は、三巻。宋の庄綽の著作である。北宋の史実や見聞を記している。

注60. 「広南」は宋代の広南東路と広南西路という行政区画のことである。現在の広東省、広西壮族自治区、海南島さらに貴州省・雲南省の一部を含む。また今日の広東・広西の呼び方の由来でもある。『中国歴史地図集』（中国社会科学院・譚其驤主編、中国地図出版社、1982年10月）第六冊「宋・遼・金時期」の「南宋広南東路・広南西路」による。

注61. 前掲注31に同じ。本文は中外交通史籍叢刊所収、楊武泉『嶺外代答校注』（中華書局、1999年）による。

注62. 「反切」とは、反、かえし。漢字2文字の音を組み合わせ、別の漢字1字の音を示す方法である。例えば塑「su」の字音を「桑故sang gu切」、または「桑故sang gu反」という形で表す。これは「桑」の頭音（声母）「s」と「故」の韻（韻母）「u」とを組み合わせることによって「塑su」の字音を示している。この字音を「切音」という。

注63. 老道公は年配の道士の意、壮族民間のシャーマンを「道公」と呼ぶ。

注64. 漢字の六書とは、説文によると、漢字のしくみの解説に用いたもので、指事・象形・形声・会意・転注・仮借の六種類がある。本論には象形・形声・仮借の三種類があった。「象形」とはその物を書き成して、（その）体に随ひて（筆画を）詰誦（きつくつ、〈訳：曲げる〉）する（こと）、日・月これなり。「形声」とは事（音符をさす）をもって名となし、譬（意符をさす）を取って相成す（こと）、江・河これなり。「仮借」とは本、その字なきも、（他の文字の）声に依りて（当面の）事を托する（こと）、令・長これなり。〔注＝（ ）は補足した言葉〕

注65. この例では、本文は「好」は「dai24」となっているが、今回チワン語をチェックして

下さった韋橋林氏のご指摘により、広西民族出版社の『壮漢詞典』（広西壮族自治区少数民族言語文字工作委员会研究室編、1984年1月）を確認した上、「好」は「ndei24」と改めた。「dai24」は死亡の意である。誤写かと思われる。

注66. 方塊壮文字は道公字ともいう。壮族民間のシャーマンが使う文字のこと。広西壮族自治区では壮族民間のシャーマン（巫師ともいう）、また師公教の男巫のことを道公と呼ぶ。師公教は道教が壮族地区に入ってから、壮族特有の信仰と融合し、新たな宗教として生まれたもの。師公教は半農業・半宗教的な存在で、禁妻帯や禁酒などの厳しい戒律はない。道公の主な仕事は、法事や様々な祭事等の際の「跳神」（神降ろしの託宣）といった祭事主導である。唐・宋代以来壮族の民間では土俗文字が作り始めた。チワン語ではこれを「Sawndip」や「Sawdauh」と呼んでいた。意味は「生僻字（なじみのない字）」であり、「道公字」は民間のシャーマン「道公」たちが写経等に用いている文字のことを言う。なお明清以来、各地にある師公館では、師公の経文の唱本は全て土俗壮文字で記録されている。

注67. 蘇永勤等が編纂した『古壮字字典』（初稿）は、1989年に広西壮族自治区少数民族古籍整理出版規劃組織委員会事務局編、蘇永勤・蔡培康等が編纂したもので、壮族地域で広く使われていた10700字の方塊壮文字を収めている。そのうち常用字は4918字の例を立て、各単語の後に同音同義異形字を掲示すると同時に、その拼音壮文を記し、国際音声記号と漢語の解釈を対照的に加えた。この辞書は古壮字の最初のもので、壮族文字研究史上のシンボリックな功績ともいえよう。

注68. 「自願・自責」とは自由な意志で・自分の責任でという略語である。国連の『少数群体権利——国際基準と執行指南』（国連人権事務局編、中国語版。2010年版）によると、第三章「国際人権対少数群体権利的保護」のA節〈少数群体権利的主要等威厳来源〉の1992年国連第47/135号決議「联合国少数群体宣言」には、少数群体の言語や文字等に対して、以下の権利を与えることを決めた。

第一条、各国は少数群体の存在及びその民族或いはその一族の子孫に対して、その文化・宗教と言語等の特徴を保護すべきである。

第二条、非公式又は公式的な場において、その文化を享受する事、または信仰する宗教とその儀式等を許可し、及びその言語を使用することを認める。（後略）

第四条、少数群体の人々にその特徴的な文化・言語・宗教・伝統文化と風俗習慣を活かす良い条件を作ることを支援すること。彼等に充分かつ自由にその母語を学習する機会を与え、教育現場で母語を使用することも容認する。

その他に1984年10月に実行された『中華人民共和国民族区域自治法』（2011年6月29日政策法規司修正案を引用）第三章「自治機関的自治権」第二十一条によると、「民族自治地方の自治機関は職務を執行する際に、本民族の地方自治条例の規定により、現地で通用する一種類の言語、または複数の言語・文字を使用することができる。同時に幾種類の共通言語と文字を利用して行政事務を執行することができ、しかも実行する自治区の民族の言語・文字を主とすることもできる。

注69. この草案の拼音壮文は現在入力出来ない字母があるため、覃乃昌『試論拼音壮文推行困難的基本原因』（『広西民族研究』第2号、1995年）によると、印刷可能の新しい字母方案に変更したという。

注70. 1966年の文化大革命によって、やむなく壮文の推進は中止された。

注71. 新壮文は旧壮文の案の32文字から、26文字と少なくなっていた。以下の26文字である。

[Aa, Bb, Cc, Dd, Ee, Ff, Gg, Hh, Ii, Jj, Kk, Ll, Mm, Nn, Oo, Pp, Qq, Rr, Ss, Tt, Uu, Vv, Ww, Xx, Yy, Zz]